

証雅の柳川



麻生路郎☆主宰

十二月号



No. 427

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

忘年川柳大会

1月本社句会

新 幸 人 混
調 福 つ 雑
題 くり 題

句の総決算の日です。

一人のこらずご出席くださいませ。

日時

十二月九日(日) 午後一時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題

「失言」(二句)

(路郎選に限り一時半/切)

司会 黒川 紫香
挨拶 松江 梅里

「栄養」(三句)

北川 春葉 選

「見切り」(三句)

西尾 栞 選

「日めくり」(三句)

八木 摩太郎 選

席題

三題(当日発表)

柳話

戸田 古方

支部対抗戦

各支部 選手

雪月花句戦

出席者 全員

呈賞

☆各題三才・五客☆各題天位から路郎選により不朽
洞賞・支部対抗戦優勝者・準優勝者及び雪月花戦

一位の組に川柳賞

余興
会費

百五十円

出席者 有志

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切十二月七日)

★忘年懇親宴(閉会後・同会場で会費五百円)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉(671)六〇八一

日本盛酒坊

和やかに まず一杯

大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
ニホンサカリ

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

錆びついた針のようでも生きんとす

彼 何か言いたく 葬式はいらないと

高架下に 女 爛れるだけただれ

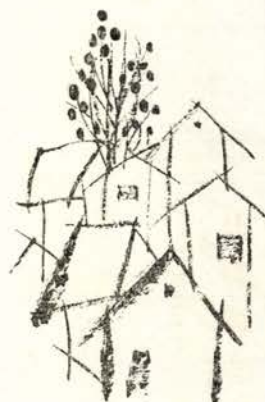
ホステスの殺されるとも知らぬ恋

盤上の歩の如く彼即死する

この夕刊も即死の記事か 冬

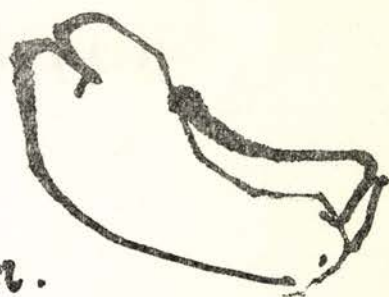
やむを得ず校長してる顔で会い

見え透いた彼の打算に乗ってやる



川柳雜誌十二月号目次

	不朽洞句帖	題字：麻生路郎・表紙：野尻弘	(9)
	句集「有情」を読んで	北川春巢	(12)
	ひととかべ	田中美喜子	(15)
	齢忘れまむし大会	東野大八	(14)
	飛燕往来	並木東田楼	(32)
	川柳のタネ	吉田圭井堂	(18)
	★現代柳人録	柳書架	(17)
	(27)		
特集	歳末の句	小石味平・千容 湖山・柳安子・文秋	(25)
	名句と難句	麻生路郎	(4)
	病氣と川柳(2)	北川春巢	(30)
	旅行苦吟	戸田古方	(37)
句評リレー		甲吉・遠二 文庫・兎	(28)
★大万川柳「弱点」発表：	不朽洞の人々　静馬氏の巻		(41)
川柳と世相について	麻生路郎		(18)
時事川柳について	直原七面山		(20)
未亡人と娘時代	水谷竹荘		(34)
三浦屋の春日野	富士野鞍馬		(16)
秋のてのひら	高鷺亜鈍		(36)
二つの話	不二田一三夫		(33)
★			
川柳塔	麻生路郎選		(6)
同舟近詠	諸生路郎家選		(11)
近作柳樽	麻生路郎選		(20)
金泥集	北川春巢選		(37)
各地柳壇	麻生藤乃選		(42)
★柳界展望			
一路集	「溜息」 川村好郎選		(41)
「すべり込み」	杉谷湖山選		(38)
「旅先」	水谷竹莊選		(39)
★柳柳室	▼ベンンの散歩		(46)



川柳 名句と難句

麻生路郎

独身の自由は蚊帳へ斜めに寝

(秋月)

オレは六無斉と同じで、両親も、妻も、金もない。あるといえるのは自由だが、それも蚊帳へ斜めに寝る自由だということである。独身を詠んだ句もずいぶんあるが、蚊帳へ斜めに寝る自由をよるこんだ句は見えないように思う。これも一つの発見か。

〔四一五〕

ニュースニュースざまますの子がすべり

(百万石)

P.T.A.の役員もしている、ざまます夫人の子が入試にすべったので、同じ長屋に住んでいて放送局の練名を持っている奥さんが、ニュース、ニュースと勢い込んで、それをふれ廻ったというのである。それに、この句から、ざまます夫人が常日頃「うちの子は、うちの子は」と言う、子ども自慢までがうかがえて、なかなか興味深い。

〔四一六〕

あの煙り一億円を焼くバナナ

(八九寸)

作者はたかがバナナだと思っていたのに、モウモウとあがるあの煙りが一億円の煙りだと驚いたのであった。斯うした驚きも川柳になることを知って更に驚いたことであろう。

昭和三十七年の八月五日の大阪の朝日新聞には次のように、一億円のバナナの煙りを報じている。

〔神戸〕台湾バナナは、五日夕方、火災放

〔四一〇〕
デイトなら仕事どうでも都合つき

(静馬)

電話のベルが鳴る。
今、忙がしいのに誰かしら。受話器を握る。

「ウム、ウム。そうか、そうか」と、声の調子も変わる。

「……………」
「それで、どこへ、そうか、ではスグ行くよ」

非常に忙しい筈だった彼は、デイトなら、何はおいても出かけて行くのであった。機微をつかんだ句だ。

〔四一一〕

若い妓等泣い聲には寄って来ず

(圭井堂)

散財異変というのか、紅燈のちまたもスツカリ交ってしまった。明治時代の清元や哥沢などの淡い声を聞かそうといったって、若い妓等には敬遠されてしまう。第一それを弾きこなす芸者がそこいらにはいないのである。

粹老人の心の淋びしさを巧みに描写した句だと思ふ。

〔四一二〕

七十五着を九日で割って見る暇

(初甫)

来日されたアレクサンドラ王女が、日本に九日間滞在されるのに七十五着の服を持参されたという新聞記事に驚いて、いったい一日に何着お召替えされるのか、と忙しい仕事の中で、九で割って見たというのである。作者が女性であるだけに、もっともな驚きだといえよう。この句は時事吟であって新聞記事を読まない人達にとっては初めから難句である。しかも解説によって句意が判ったとしても、詩美は稀薄である。

時事吟の多くが難句になり易いこと、詩美の稀薄なことの例として挙げておいた。次に、アレクサンドラ王女について今少しく述べておこう。王女は英国の王室から美しい使節として昭和三十七年十一月十四日午後四時、特別機で来日された。正式の名はプリンセス・アレクサンドラ・ヘレン・エリザベス・オルガ・クリスタベルと申され、一九三六年、ジョージ五世の第四子ケンツ公と、ギリシャ王室出身の美しい公妃の間に生まれられた。五つの時に、父君を亡くされ、いなか町のコピンズで、王室で初めての庶民的教育をうけられた。背丈は一メートル七〇近くあって「歐洲王室NO.1」といわれる美貌で、ブラ下り服もデイオール・モードに見えるほどのベスト・ドレッシングでもあるそうだ。

〔四一三〕

ステテコで家庭教師を父勤め

(柳瓢子)

すし詰めの電車で出勤し、すし詰めの車で帰宅する父は、暑い暑いといいいながら、夕食がすむなりステテコのままで机に向う。それは自分の勉強ではなくて、子どもの家庭教師としてののお勤めなんだ。こんなところにも安サラーマンの悲哀がある。

〔四一四〕

射器によって、わずか十分余りで、火葬にされた。理由はコレラ菌の防衛のためだった。四日夜の徹夜作業で、神戸市兵庫区和田岬の市埋立地に掘った長さ百メートル、幅七メートル、深さ二メートルのゴウの中へ、兵庫突堤からトラックで運ばれたバナナのカゴがつぎつぎ投込まれた。片っぱしから重油をぶっかけ、まっ黒になったカゴは、力なく「墓場」へ横たわった。この重油代だけで十五万円。玉山丸がさる七月三十一日積んで来た約一万二千カゴの半数が投込まれたとき、伊丹から陸上自衛隊第三師団三十六普通連隊の十人が到着した。細長いゴウの両側から、火炎放射器が二台筒口を向ける。「発射」……ブワッと炎が五十メートルも飛んだ。重油がしみ込んだカゴの山は、火山のように発火した。黒いキノコ雲がまき上がる。その下でムキ出しになった青いバナナのふさがみるみる黒く焼けただれてゆく。すさまじい火葬に、一般の作業員たちは一瞬息をのんだ。残る半分は六日朝から同じ方法で焼却し、コレラ防衛の犠牲として約六千五百万円（輸入価格）のバナナが灰となる。

〔四一七〕
くやしさを妻が抱いたらケロリとし

(可住)

「あなた」
「なんだい」
「すみませんが、ちよいと赤ちゃんを見て頂戴！」
「たまの休みにかい」
「でも、お洗濯がしたいのよ」
そこで仕方なく赤ちゃんを抱っこする。ところが、足で蹴って膝からすべりおろして、

泣き出した。すかして見たが、どうにもならない。
「しょうがないのネ」と妻が、エプロンで手をふきふきやって来て、赤ちゃんを抱きあげたら、抱きあげると同時に、ケロリとして泣きやんだ。その時はどうかやしいことではなかった。オレはババじゃないかと言うのである。赤ちゃんを扱ひなれぬ男の一面を巧みにとらえていて面白い。

〔四一八〕
クルマ買いましたとお墓へ申上げ

(風仙洞)

どうか商売も眼鼻がついて、クルマを乗り廻すようになった。ホッと一息つくくと先祖の墓詣りをする気にもなった。「クルマ買いましたで」
と、お墓へ報告した。それは自分の大きなよろこびでもあり、先祖への誇りでもあった。いままでの苦労が一度にはとばしり出たような一語で、その心境が躍動していると思う。

〔四一九〕
じうたんに今日の思想は死んでいった

(孝風)

野にいたる間は社会主義の闘士として名を売っていたが、一度衆議院議員となつて、じゅうたんとを踏むと曾ての思想が漸次軟弱になり、保身の術に隠れる人間になり終わるものだ。そこを衝いたのがこの句だ。
じゅうたんなは衆議院のこと。

〔四二〇〕
金借りて帰れば妻子フラフラ

(花村)

収入は赤字、赤字の連続なので、先輩に泣きついて、クルマを譲り帰って見れば、妻子はノンキそうに、フラフラに興じていたというのである。フラフラ・ブームとはいいいながら夫の苦虫を噛み潰したような顔が見えるようだ。

フラフラは直径一メートルぐらいのプラスチック製の輪で、その中へからだを入れ、落ちないように胴体で振りまわす遊びである。美容体操にもってこいだというので、一九五七年の夏オーストリアで流行した。日本では昭和三十三年の秋にフラ・フープ・ブームを呈したが弱い子どもがあまり熱中したので腸に穴があいたとか、輪のつぎ目がはずれて眼を突いたとかの障害が続出したため、間もなく下火になった。フラ・フープの名はフラダンスのように腰を振って輪をまわすところから出たのだそう。

〔四二一〕

寄附をするのに願書のいる役所

(宵明)

あわれな戦争未亡人の母子寮へ少し寄附がしたいのですがと、すくなくからぬ金員を福祉事務所へ持ち込んで来た。
予算、予算で、いじめぬかれているので、ひったくりたいほど、欲しい金だが、ヤスヤスと有難うとは言わないのが役所だ。
「では、願書を出して下さい。手続をいたしますから」と言うのである。願書というのがピンと来るではないか。皮肉な句だ。

〔四二二〕
昼めしを喰べたかいなと十二月

(玲人)

十二月は誰にとってもいそがしい。それに日がいたって短いので、またたく間に日が暮れる。
「オヤッ、今日は昼めしを喰べたかしら？」と思う。斯ういう経験は誰にでもあろう。そこにこの句の軽い穿ち味がある。斯うした句は誰でも詠めそうだが、サテとなると見通がし易い。

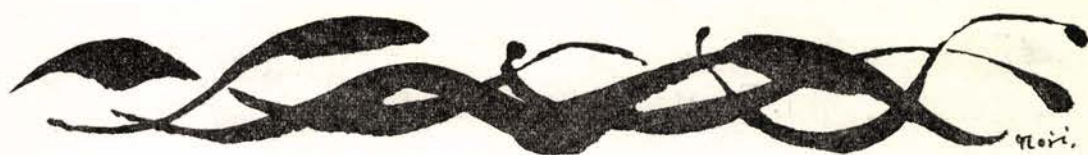
〔四二三〕
飛脚でもきっちり文箱届いたに

(圭井堂)

その昔の飛脚でも、的確に文箱が届いたのに、近ごろの郵便物の遅配や誤配はどうしたことかとなげいたのである。そのなげきのなかには反感すら含まれているし、郵政当局へ投げた皮肉でもある。
飛脚は中世の手紙や貨物の運送人夫である。起源は古代であるが江戸時代に最も発達整備していた。継飛脚は江戸京都間を六六時間から八〇時間で急行したものだ。飛脚は一八七一年に廃止された。



ビールは
アサヒ



川柳塔

大阪市 市場 没食子

停年へもう早いもの夏が来た

女ぐせも悪いが金もよう儲け

西宮市 若本 多久志

かんじんのとこは答えずまあお酌

スイスイと大阪弁の嘘が出る

汚職記事あゝ先輩の名を見付け

大阪市 正本 水客

なまの釘へそのままかける服であり

落葉集めて自分の心焼かんとし

手に乗せて熟柿の重さたのしんで

大阪府 西 いわを

留学はしたがボケていると云う噂

二人目が生れ此の次どうしよう

大阪市 北川 春巢

交通巡査が真っ先に冬となり

あの人もそろそろ孫の句を作り

たこ焼きを買う人妻の顔もせで

戴帽式看護婦長も少し塗り

ホノルル市 築山 快夢起

孫娘ツイストとフラ群を抜き

ボキサーを連れて散歩も見栄であり

老いぬれば実の子にまで邪魔にされ

犬が恐くて恋人により会えず

ワイマル 羽佐 間柳葉

地価暴騰なぜ父さんは買わなんだ

衣食だけに精一杯と子は知らず

選挙運動多年の知己の顔で来る

揚げ足を取る候補者は高が知れ

堺市 吉田 圭井堂

日曜大工今日は障子を張らされる

外出をとがめる母も出好きなり

中年の皺が皺がとコマーシャル

あと戻りして一円を見のがさず

立ち遅れなどと年中やっついて

下関市 国弘 半休

酔うて来てもう善人のいびきする

年上の彼女何やら彼やら呉れ

防府市 長野 井蛙

金だけが頼り近所とつきあわず

ハッ当たりどうやら席が気に召さず

頬の傷笑えば笑うほど凄み

岡山県 直原 七面山

献盃へ高血圧をふと忘れ

二次会を言うていたのが酔いつぶれ

黒を着て女静かにタバコ吸う

盃伏せて別れ話の口火切る

抱擁して娘理性の弱さ知る

地下街に住んでおいらはモグラモチ

停年退職女房も手持無沙汰なり

もう一押しされれば落ちたにと妓

義妹と出来たも神のおぼしめし

イナゴ一匹姿も見せず秋静か

鳥取市 河村 日満

手拍子へ上には上がある踊り

S工場にて



始業ベル軍艦マーチ鳴り響き

豊中市 足立春雄

若さには勝てず茶店で待つとする

流行を追えたは感冒の時位い

倉敷市 木村千容

セザンヌの前で動かぬ石となり

皇太子またおいでんさいと老婆

ザザザッと山陰道の雨の音

露天風呂働く女聖女めき

倉敷市 田垣方大

御近所は乗ってくれない自家用車

雨降りはお出かけでない自家用車

自家用車散髪にまで乗りまわし

免許証夫人の方が早くとり

加賀市 野村味平

ゼンマイの振切れたように君は逝き

金いじる職がつくつく厭になり

大阪市 木村水洞

貨幣価値だけが下った政治力

嗚呼香林・若菜御夫妻

ご夫妻の披露これからもう聞けず

大阪市 真鍋一瓢

秋の金魚の愛想のない事妻に似て

街を静かに音もたてずに轢いて逃げ

敷いている自覚はもたず主婦の会

大阪市 佐野白水

今日一日私売ります安定所前

特急の不便はお茶を買いそこね

大阪市 後藤梅志

電話帳眼鏡二つでさがすなり

療住居謡いも座るけいこから

米子市 小西雄々

電柱が邪魔チャンバラのロケが来る

出戻りが形見をわける指図する

愛称で妻呼ぶ男にドギツとし

大阪市 山川阿茶

ほんとうに罰やと思う人が死に

売り掛をヤイヤイ言えば他所で買い

大阪市 金井文秋

借電話なのにすねたりあまえたり

人事課に同情されている辞令

初孫生れる

孫が言わんのはたからおじいちゃん

加賀市 那谷光郎

やめもせぬざる碁の盤を拭くも妻

チョットでも世話した謝礼の謎をかけ

出雲市 尼緑之助

ほとばしる血汐のようにスピード禍

大阪市 水谷竹莊

退院をしたら定期は切れていた

看護婦の夢を患者も聞かされる

鳥取市 杉谷湖山

立ち話しつついてガムの味が消え

東京都 山根白星

衣食足り住を土管の中にする

公約を果たす愚かなものが居ず

資本家の面罵に耐えた貌いびつ

カロリーを云われた姑も黙りこみ

ちちははに屋上の恋まだ内緒

主賓もう鯉へ微薫を帯びて佇ち

ギブアンドテイクで主役ふりつける

奈良県 飯降白香

ニヒルなところがもてて女を変えてゆき



猪突猛進四十にして斃れたり

奈良県 西 辻 竹 青

停年退職放した犬にさも似たり

足袋の裏の黒さに宿のレベル知る

岡山県 福 島 鉄 児

仮縫へ猫背のことも云い添える

岡山市 服 部 十九 平

どうサバをよんでも百万にはならず

色旨にあらねど夜店で買い損ね

西宮市 若 林 草 右

解説のようにはいかぬ相模の手

メモ帖に書いてメモ帖見当らず

イワンの馬鹿今はダンブがやって見せ

紙よりももうすい松茸汁に浮き

高槻市 山 田 季 賛

寮住いトランジスターでするガマン

地球改造あつちもこつちも山削る

先輩が僕の暮しへ口を出し

風鈴よ早くも秋の虫が鳴く

岡山県 田 村 藤 波

清貧にあまんじ恩師世にすねず

捨てきった故郷の役場に用が出来

児島市 本 田 恵 二 朗

入墨をほんきでかくすほどになり

抱いてみてなるほど健康優良児

京都市 松 川 杜 的

秋空の何処かで風船割れる音

療養所一年もうええのんができたらし

堺市 高 崎 雄 声

優待券落してからの有難味

買物が好きと云うのも女なる

商売にむかぬひとやと妻さとり

島根県 藤 井 明 朗

主婦の力期待しますと講話すみ

金婚式祝盃孫に酔わされる

倉敷市 野 田 素 身 郎

煙火打ちあげて大会ムードが出

マスゲームわが子の演技にだけ見とれ

共同募金税吏がすぐ出し惜しみ

大阪市 伊 達 堰 子

花鉢何を庵主のもの思い

靴磨きもちつもたれつの灯をならべ

大阪市 不二田 一三夫

板噛るネズミに生き方おしえられ

女色漁りでもプロなら筆で食え

ダフ屋でさえボクの顔には寄ってこず

生きるのがじゃまくさい日もあり雲を見て

くちびるを奪ってキミが好きやねん

卑劣だよ娘の日記読むなんて

昔屋市 丸 川 初 甫

埃まで見てゆく税務署の眠つき

富士五湖めぐり

大観の画に似ず富士に桜なし

やどり木も七種とあらばバス止まる

岡山県 池 田 古 心

有難く又迷惑な古家継ぎ

大阪府 早 川 清 生

神戸高台交互にホテルと領事館

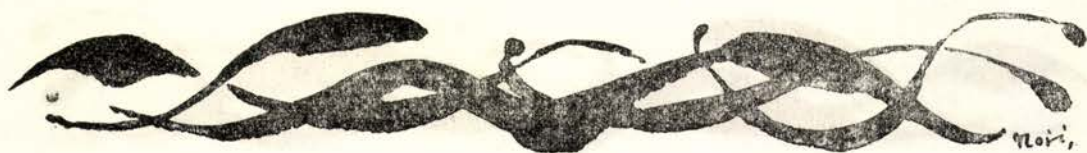
土曜の稽古欠かさずにきて美女ならず

秋の夜のことに病院輝けり

参道で遇う商敵を黙殺す

この人も妻に程度を下げて云う

大阪市 西 田 柳 宏 子



御堂筋犬も信号通り行く

出来もせぬくせに責任呼ばわりし

堺市 辻 圭水

日本シリーズ仕事の能率下げてすみ

空席が勿体ないよな良い試合

一票にならぬ後輩ほっとかれ

大阪市 児島与呂志

寄附承知P・T・A・の役を受け

末っ子に似た子を相手にする車掌

西宮市 小浜 牧人

花電車 車庫は花嫁出すごとし

会釈して私服警官とは見えず

釣堀へつるべ落しの日が暮れる

大阪市 橘高 薫風子

寺と萩マンネリズムも美しや

十二月某日ブランコ揺りいたり

大阪市 榊本 落児

運根鈍結局金がものを云い

眼鏡ふきさてそれからの小言なり

さすが京ポリさんまでがやわらかし

米子市 城内 吾柳

盛礼は癡しお礼は貰うとき

家族連れで来られたらなと湯にひたり

ゴム長へ古い靴下出してくる

大阪市 西川 晃

武部香林氏を悼む

死へ続く道淡淡と手をひかれ

若菜夫人を悼む

頑として極楽へまで従いて行く

「セックスが最高ね」とは凄まじい

適者生存殺し屋であろうとも

釜ヶ崎でもこほろぎの声は澄む

罪深い手で仏壇の掃除をし

鳥取県 田中 蛙眠子

老巡査秋灯寄せて平次読む

高血压で入院

血圧症三人寄れば恋酒談

神戸市 仲 どんたく

スードショーはだか一貫張るからだ

抱擁へおまわりさんが気をきかし

灰皿が無い清潔な女部屋

平田市 久家代仕男

釣れますかなども云わず稲運ぶ

大阪市 本多 柳志

代数でならと算術見てやらす

ヒューマニティ過剰で刑事出世せず

十月のヘチマの艶も社員寮

出雲市 原 独仙

ホテル建つそうなあの丘恋の丘

三振へ実力言わずついてない

西宮市 野呂 鶴汀

一番の子を持ち親も子も疲れ

日曜日医者と思者としてでなく

抱くつもり煙草ゆっくり消し終える

西宮市 樋口 舟遊

コレクション明治の賈の札もあり

新潟県 高野 むじな

旧カナで書いて一ぱし著述業

アルバイト迄してビストル買うて来る

米売った学資で百姓せぬ子にし

大阪市 石倉 旅風

登山バス柿に触れそで触れずゆく

多すぎる釣を返せばブイと取り



一円を踏みつけて行く紳士靴

いじらしいほど世話好きな未亡人

大阪市 魚住 満潮

続 西成界わい

川埋めて木津や難波の影もなし

片棒をかつぎ刑務所まで一緒

雑炊十円立看板をたたく雨

愛媛県 村上 旭童

おみこしをかつぐ人手にも困り

荷の過ぎた車にも似て子沢山

神戸市 傍島 静馬

頑としてビルの谷間にあるノレン

赤い羽根乞食のシヨバを塞いでる

笠岡市 木山 遠二

よく腹をへらすものなり損の豚

こんなとこ田がありこんなとこに人が住み

大阪市 仲谷 ハナ子

御堂筋銀杏の下で写真とり

布施市 森下 愛論

音立てて茶漬せわしき小商人

美人だから追っかけて行く忘れもの

大阪市 河井 庸佑

親の氣に少しはなれと参観日

親の目に新教育がもどかし

大阪府 谷沢 好祐

しんどうてとは麻雀のことでした

ゆっくりと来たに信号待ち切れず

泉大津市 高津 徹也

去りゆきし人が私を大人にし

いとしさと哀しさだけのドラが鳴る

十九の貴女は緑の夢を持っていた

愛媛県 榎 紫光

女から警戒されぬのも寂し

追い出しておいて栄転おめでとう

停年後折目の消えたズボン

青森市 工藤 甲吉

くちびるを求める女年が上

御婦人を待たして紳士叱られる

宝石の前に人間安過ぎる

恋をしてニア人だけの島が欲し

松江市 小林 孤呂二

馴れてしまえば教室せまく見え

ローカル線ごみ一杯を吐き出した

豊中市 林 夢虹

レンズがとらえたばかりはうすべらだった

自画像をいつもみにくく描く癖が

地下をみな空洞にして大都会

大阪市 今西 生薑

いつまでも使いその名は臨時工

京都市 室井 八九寸

先生をひやかすまでに謝恩酔い

制札に生き残ってる宮内省

近寄って黙って背を向けるチャック

朝顔を有刺鉄線不関巧

岡山県 横山 一声

嫁く時はよいムコさんであったはず

原爆の世にも案山子は弓を持ち

小松市 関戸 宗太郎

賈札もなくレジスター欠伸する

末っ娘が嫁ぎ貸間の札をはり

美称市 安平 次弘道

アリバイは名店街の土産買う

お守りと言う紙切れに頼る弱さ



宇部市 平 田 実 男

調停員同じ悩みが来て慌て

右に折れますと車掌も肘を張り

諫草市 川 岡 靈 眼 子

観てはめて貰える土地があるジャパン

靴ふめど昔の音の石畳

大和郡山市 中 内 孚 彦

受験生皆愛情に飢えている

停学を食って初めて見た校長室

貝塚市 杉 本 一 鶴

もったいなくも朝風呂へ陽がおどりこむ

だんじりへ医局の窓もあけられる

富田林市 浅 川 八 郎

病める身の喜ぶべきか古稀の宴

岸和田市 内 藤 幸 子

発会式腕章ほどの用もなし

日曜の亭主蜂の巣叩かされ

腰紐のままでうれしい電話きく

青森県 木 村 凉 人

お宅さんなんかと羨みあう女

年頃の不具をまともに見まいとす

草臥れた札も親しいものうち

黄色い歯ニヤリ大根高く売れ

大阪市 唐 崎 専 翁

生き延びてみたが欲で老い^ホ老れる

経済の世には避けるか突つ込むか

老い^ホ老れた余命を稼ぐ心意気

倉吉市 奥 谷 弘 朗

天皇の研究ベストセラーがほほえまし

印象は共産党に近い人

同 舟 近 詠

須坂市 高 峰 柳 児

売るために血液型を心得る

敗けて悔ない残念会が派手

いつのまにかじらした女に折れている

東京都 阿 部 佐 保 蘭

シャンソンと珈琲の店おナンザにて

色硝子(ヤマシ)へ彼女の年は三十五

和歌山市 秋 月 宏 方

大ジヨッキほら吹きあつて飲むもよし

提灯はわらじをはいて持つ道具

セーラ服背丈父にも肉薄す

今治市 長 野 文 庫

角家の値をつり上げる大企業

先頭の旗が男のヒステリー

一株も持たず暴落小気味よし

酒持って来るのを見越しご案内

大州市 米 沢 曉 明

はるばると来しかな襟裳の風に立ち

時計台の鐘札幌の空は澄み

札幌の旅情とうもろこしを買う

久々に訪えば錠前かけて留守

P・T・A・やっぱり親は馬鹿でした

松山市 月 原 宵 明

曼珠沙華村の神輿と同じ色

狂人のあたまたに挿した曼珠沙華

木せいの香りここらは屋敷町

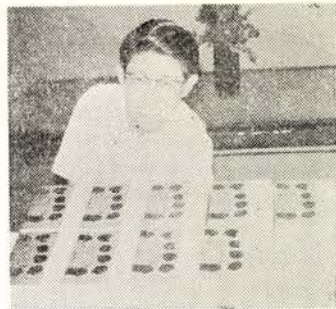
残り膳仲居留守居の子にふれる

夜逃げして北海道で議員もし

名古屋市 長 谷 川 鮮 山

あやまって来て気が楽になった顔

同上の「有情」にニッポリ薫風子氏



句集

「有情」を

読んで

北川春巢

も路郎先生は書いておられるが、お父上は既に故人になられた由、「あとがき」に書いてある。その「母に孝養の人」である証拠に、句集には次のような句が出てい

る。もう嘘を見抜いて母の眼が

優し
あたたかし孟母のような母

ならで
母上が阪大病院へご入院になって心配されている話はその当時聞いたように思ったが、その時の句が、

一匹の蚊に病室の広いこと
である。夏であつたのだろう。母

上の枕辺に付ききつて一匹の蚊を追つていられる氏の心配顔が想像できるようだ。

墓建てる孝行がまだ残つて

これはお父上に対する孝行を心掛けておられる氏の述懐である。

「妻子には愛情深い、よき夫であり、よきパパであることは句によつてうかがい知ることができる」と

と続けて路郎先生は書いておられる。「よき夫」としての句は、例

えば
子が生れ 妻 宝石をもう

言わす
「今まではあれほど欲しがっていたダイヤだが……あわだ。」と

いうのである。
妻若し 水道一っぱいにひ

ねり
居間に坐つていて、奥さんの動作を観察し、耳まですましている氏

のなごやかな顔が浮かんで来る。

妻の留守 食パン真っ直ぐに切れず

奥さんの留守の心淋しさが、パンを切る動作に詠まれている。

「よきパパである」句はさらに多い。これは日本人の通性として、奥さんのことは、余り口にせず子供のことは句にすることが多いので、氏の場合も当然であろ

う。
暖い書斎 麻疹の子にとら

れ
熱の子へ眼鏡をかけたまま

眠り
いかにも子煩悩であり、よきパパ

ぶりが句に出てい

子
子の潔癖 母の枕を父にさ

せず
この句など、子供を中に入れて寝

室の様子をいやらしくなく詠みこ

なしてある。非凡の句である。

父と来てずっと風呂敷持た

される
実力でした合格と子は思い

「子を持って知る親の恩」で

「子」は氏自身、「父」は亡き父

上ではないかと思う。風呂敷を持

たされて情なかつた思い出、自

分の子供に対してはそんなことはす

まいという反省、子供が幼稚園へ

入るにつけての心配、先生へのつ

け届けなどから、自分の大学へ入

った時のことを思い出していられ

るのだ。

「橘高薫風子氏、巻頭二回、私には氏の年令がどうしても分らない。銭屋の如く現われて一頁組に入った人である。こういう人はえてして川柳組し易しとして、すぐやめてしまう危険がある。どうか本年も、いや長くこの情熱で作句を続けて頂きたいものと思う。」

右は去る昭和三十一年一月、「川柳雑誌」第三五六号に私が執筆した「好作家展望」の中の一節である。私は当時薫風子氏を全然知らなかつた。年令も分らなければ、男性か女性かの性別も、雅号に「子」の字があるために分らなかつた。実に銭屋の如く誌上に現われて、昭和三十一年度では「近作柳樹」欄の巻頭を占めること二回、目を見張らざるを得なかつたのだ。

その薫風子氏がこのたび個人句集「有情」を世に問われた。しかもそれは路郎先生の序文によれ

ば、氏の作品の一段階としての発表だということである。「川柳をすぐやめてしまはせぬか」という私の心配はみこと杞憂に終つてしまったのだ。私の心は嬉しきで一パイである。この喜びをどういつていい現わしてよいか分らないくらいである。

私が氏を知つたのをいつ頃だか思い出せない。西尾榮氏が指導しておられた明和病院川柳会に所属しておられたのだから、私が明和病院支部結成句会に選者として招かれた時にも、おられたわけであるが、その時は大勢の方々の顔々々が一度に眼の中へとび込んで来たので、個人的に氏を知つたということはできない。その後（昭和三十一年二月）不朽洞会員に推薦せられ、また間もなく、「川柳雑誌」の編集局員になられてから、はじめて知つたと思うのであるが、そのお若いのに驚いたことを覚えてい

る。「有情」の「あとがき」によれば、氏は今年の七月十日で満三十六才になられた由であるから、私がさきに「氏の年令がどうしても分らない」と書いた頃はまだ三十才であられたわけだ。「年令が分らない」と書いたわけは、お若いような句もあれば、また老人臭い句（老成したといおう）もあつたからだが、老成した句があつたということは、氏の常識田満さのためであつたのであろう。世の中の酸いも甘いも知り尽しているという常識である。路郎先生も序文に、氏は「社会の一員として、一ト通りのエチケツトを心得た好青年紳士である。」と書かれている。この言葉が氏を評するに最も適切な言葉であらうと思う。「百聞は一見に如かず」で、氏をまだ知らぬ人もその「好青年紳士」ぶりは「有情」の扉に入っている著者の写真で見られたらよいと思う。

「老いたる母には孝養の人で」と

私は多くの言葉を費して氏の人となりを書いて来た。私の目的は句評にあるので、一見駄弁を弄したとも思われようが、しかし作者

の人となりを知らずしては句を評することはできないのである。また反対に句によってその人となりを知ることもできると思うのである。

なお一言するなれば、理想的には、句によってその人となりが分るような句を作らねばならないのだ。それを「個性の出た句」というのである。私はいつも「川柳では嘘はいえない。」と思つていくらフィクションは自由であるが、川柳では小説のように心にもないことを句にすることはできないことを、私は経験上知つてゐる。「川柳は人である」ともいえるし、それが川柳のよい所であると思つてゐる。

私はまた初めから薫風子氏の年令にこだわつてゐた。いかにも人間的に老成されたような句が聞々見られたからだ。

竹植えて「雨うつ音を樂しめり
雑念をしずめる丸き壺は持ち
ち

さびしさは一本杉に似て老
いる

これらの句は前に述べた「心にな
いことは川柳には詠めない。」と
いう私の考えでは、老人の心境で
ある。句品も申し分ないが、薫風
子氏の心底には「老境」が隠れて
いるといえよう。子供がわざと大
人ぶりたい気持とは大いに違ふよ
うな気がするのである。また
酒の手のあがりしのみに四
十過ぎ

四十過ぎ ようやく向い風
となり

などの句では、老境とまではいか
ぬが、「四十過ぎ」の氏の分別が
出ていると思われる。

しかし、実際には氏はまだ若い
のである。氏の心底には「恋」も
あり「情熱」もあることもろん
である。

眼鏡にも青葉映して恋たの
し

恋あわれ 男が花の水を替
え

鶏頭の紅さが憎し 逢えぬ
日は

モーニング着た日も顔を見
せに來る

花の香を嗅ぐ顔をして接吻
し

いずれも「体験」でなければ「見
聞」である。氏の川柳眼を通して
見た風景であることは間違ひある
まい。「眼鏡にも」の句などは、
氏は眼鏡をかけておられるのだ
し、「体験」でなければ到底でき
ない句のように思われる。しか
し

わが妻になすべかりしを
賀状書く

に至つては、体験というには余り
にも赤裸々な告白である。一篇の
悲恋物語といわざるを得ないが、
こうなると体験が否かは問題でな
く、氏の「情熱」をはつきりと見
る気がするのである。

氏の常識田満、社会批評の句は
句集の到る所に見られる。路郎先
生の「一ト通りのエチケットを心
得た」といわれる所以である。エ

チケットを心得ているが故に、非
道なことが行なわれると思わずも
憤慨の句がでる上るのである。

ブラスアルファ 心さもし
く解決し

此の人も 金を持たせば愚
かなり

檻の鶴 又眼を閉するほか
はなし

学生を矢面に立て 国貧し
一線を自分で引いて淋しが
り

人相が金貯めだしてから変
り

真人間だったばかりに死を
選ぶ

以上は薫風子氏の常識田満さから
出たと思われる句を並べたのであ
るが、逆にこれらの句から氏の人
となりを推し計ることもできる、
ということは前に述べたつもりで
ある。しかし人間は理性の面はか
りではない。感情の面もあるのだ。
私達は氏の詩的才能をも見逃
してはならないのである。氏の詩
的才能の閃いてゐると思われる句
を列記してみよう。

煙草のけむりも窓から出て
行けり 春

鳥取砂丘 砂丘有情 お前と月の出を
待とう

白浜千疊敷にて
海の没り日に 岩礁のみ染
まろうとせず

十二月宝石の美の極まれり
牛小屋に月光美しき浪費
都会の哀愁 ナイターの灯
が消える

牡丹へは 蜂も静かな訪問
者

「あとがき」によれば、本句集中
の約半数は雑詠吟からとり、残り
の半数は課題吟として作られたも
のの中からとったとのことであ
る。どの句が雑詠吟として作ら
れ、どの句が課題吟として作ら
れたのか、いちいちの句について
私は調べてはいないけれども、課
題吟として作られたものは、課題
をとり去るともう一つピンと来な
くなるような句があるものである。
いったら悪いが、集中にもそ
のような句がないとはいへぬが、
やむを得ぬことであろう。

なお、句集を通読していると、
発想の上において、句のリズム感
の上において、何だか以前に読ん
だことのあるような、従つて一面
識ではないような親しさが感ぜら
れる。よくよく考えてみると、そ
れは路郎先生句集「旅人」にどこ
かが似ていると思われるのであ
つた。しかし「旅人」をもう一度細
いてみたが、もちろん同じ句とて
あるわけではないのである。ただ次
の数句など、多少似ているといえ
ばいへぬでもないことを発見した
に過ぎない。

振り返りはせぬかと 女
まだ立つて

(愛人が雪の中の一点となりぬ
男へはつらい逢瀬と言うて
おき

！(人前は家賃位というて置き
路郎)

日当りの悪い窓なり株式課

(学校とは違い会社のうすぐら
さ 路郎)

とまれ僅か十七音字の川柳のこ
とである。似ているといへば、み
んな似ているといへぬこともない
のであるが、薫風子氏が路郎先生
の句に似ようと努力されたことも
多分にあるに違ひない。その努力
によって、路郎先生が五十年かか
つて築き上げられた「旅人」の道
を僅か五年や六年で追い付かれた
といひ得るならば、それは偉大な
事業であるといわねばならない。

薫風子氏はさらにこれからも努力
研鑽されてこの道を進んで行くつ
もりだといつておられる。路郎先
生に追いつく努力が多少実を結ん
だことは認めるにしても、今後は
先生を追い越して「出藍」の句を
作るべく精進されるよう祈つてや
まない。

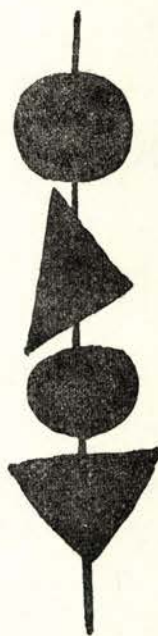


●疲労・食欲不振
●神経痛・肩こり
●便秘・つかれ目
タダ製品
プリン
プリン

齡忘れ

まむし大会

東野大八



「おお、いいところへきた、今夜八芳園でマムシ大会があるので一緒に行く、じゃ五時にな」

久しぶりの東京なんだが、僕の電話をうけるなり、相手のT君は前口上ぬき、毎日顔をつきあわせているような調子でのっけからこういってアッサリ電話を切った。

T君は東京を舞台に飛び回っている日刊紙の学芸記者だ。びん髪すでに霜深く、僕と同じ齡ごろのご仁だが根っから氣は若い。酒にかけては僕以上に眼が無い。どうせやっこさんと久しぶりに一パイというのがこちらのコンタンなんだから、相手のちよつと弾み方の上向きなのを諒承して従来通りの時間に社に出かけた。

社旗をひるがえて二人はやがて芝白金の八芳園に向った。秋雨がしよ条と降っている中を、車は走っては止り、止っては動いてやがて都心とは思えぬ深い木立の

一画の中へ、砂利踏みしだいて車がすべり込んだ。

「大久保彦左のいたお屋敷だそうだがよく生きながらえていたもんだねえ」というと

「久原房之助という金持ちが買ったんでしょ」と

と運転手。金持ちにはかなわねえな、というときらびやかな玄關前に止まった。

「いらっしやい」と景氣よく受付で声をはりあげているのが松井翠声。

「秋のマム大会々場」という大張紙のあるその辺は、貴顕男女がざわめいている。紅リボンをつけてもらって会場に入ると、百に近いテーブルがビールを

林立させ、菊花を盛りあげ山盛りのデザートに卓上せましと押しな

らべぎしりだ。われわれは招待席の中の最上席とも思われる舞台近くのテーブル番号だった。

「マム大会というのはマムシ酒とマムシ料理の会でね、年一回盛大にお祭りをやる、本夕はその一席というわけだ」とT君は説明して、早くも卓上のويسキー瓶の口金をとった。

「マムシ酒だ、こいつをあんまりやると衛生に悪い。去年の大会で此奴を一本半飲んだら翌日頭が上らず一日中うなりながら悪戦苦闘をしたもんだ」

酒と名がつけばマムシであろうとカエル酒であろうとこちらは頓着なした。そんなにきくとはうれ

しい美酒だ。とたちまち意地の汚いところをみせて一気に干す。

「ヘビ料理はこの折詰の中にあるが、まずは卓上のデザートが順序だろうな」と

といって六人がけでまだ人無き

幸い、うまそうなのからアレもコレもと受け皿に頂戴する。掛りのキレイなお女中が心得えてたちまちビールを二、三本氣安くポンボ

ンと抜き放って、さあどうぞ。

やがて舞台に翠声が現われた。そして得意の軽口で一座を笑わせると、かくしゃくたる一老人が登壇した。

「このご老人がマムシ料理の草分けでね、七十幾つというのにこの調子だ。いまの細君は三度目でね、なんと三十幾つだそうだが、それにもかかわらずこの老亭にタジタジとあるそうだ」

「そういえばあの顔まむしとそっくりだ」と

とこちらはいい気なものだ。そんなフテイな客がいるとも知らず正面の老人。

「アナを出てアナへ入りまたアナの世話、という古川柳がござりまするが、このアナかしこの恩沢は月三回交って老の初めという……」

とマイクいっぱいには声はりあげて笑わせる。やがてそれが消える

と、つぎなるご仁は山イモのタネ茎みたいなおばあさんが現われた。

「女だてらにヘビを食うなんていうのは、あの声でトカゲ食うかやホトトギスの例もござんす。女は女としてマムシの効き目も敵方とはまたちがつたところに効きまし

て……」

と大したお色けだ。あれは誰だ

い、ときいたら村田嘉久子だ、とT君が答えてまたマムシスコッチ

を口の中にそそぎ込んだ。

このころから場内は人いきれのするほどの満卓となり、がやがやわやわや宴会はだんだん笑うことが出来たという誰やらの句にな

ってきた。僕達のテーブルもどうやら席がふさがった。

「紹介するとな、向うでやき肉ばかり食っているのがさし絵画家の志村立美、その前でマムシ酒はかりやっているのが同じ仲間の鴨下

兆湖、そのこつちが奥野信太郎博士だ、その次は、さて誰かな」

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

小声でそういつている向うのテーブルでにわかに喚声が上がったと思うと中沢不二雄バ・リーグ会長と石黒敬七だんなが巨体を現わした。ツルツルはげと黒メガネの

大デブ登場に、司会の二番手並木
一路も大忙し。中沢さんが舞台に
ひっぱり出された。

「わたしはもう七十の声をきいて
いますけれどもかくの通りです。
ご自慢の頭は二十九からのもので
今となつてはそれが自慢で……」
と話術は堂に入ったものだ。

平野威馬雄が得意の艶笑詩をや
れば、長崎按天が絵を描くといひ
出し、玉川一郎のおはこのユーモ
アコントロリを披露して
「マムシを食べても操の固きこと
は女房の認むるところですが、そ

の女房が今となつてはみきおの
固きにみきはいらない、と許す
まじきことをスケスケと申しまし
て……」
と満場大笑い。

こんな具合で僕もT君もタダだ
と思つてマムシ酒を大半平げ、
ビールが足らなくなつてお隣りか
らおすそわけを願う始末。

「やあ、久しぶりですね」

という声に横をみると、北京でお
なじみだった立野信之がもつそり
と坐つていた。いま来たばかりと
みえ、この明治大帝もつそりとし

ている。やあ、やあ、といつてい
るうちにあちらこちらから、顔な
じみが集つてくる。むかしマキノ
映画華やかなりしころ学生五人
男の一人で鳴らした丘龍児やテ
レビ俳優の傍役でモリモリ稼いで
いる安部徹や杉岡なんとか。どれ
もこれも四十半ば以上のマムシの
精分いと慕わしくまた恋しきの顔
ばかり。

この日、満卓の男女のおレレ
キは、僕の辺りだけのご仁に止ら
ず、ゆく年、来る年に現実の年齢
や肉体に想い半ばを過ぐる人達が
も出来るもの。そこに人間という
ものの解釈のむずかしさがある。
内省に内省を重ね、努力に努力を
積み重ねてもおそく人間探求の
到達点には達する事は不可能だろ
う。その上幾度会つて見ても新鮮
な興趣を湧かせたり、意外な発見
があったりもする。これ等のさま
ざまの人間像の提示を人々はもつ
と深く掘り下げて考える必要があ
る。若し人間はこの世にたった一
人置き去られたら気遣いになるの
も忘れてるのだ。どんなところに
どんな壁が作られようと一人一人
の人間は東西ベルリンの兵士の一
人一人の如く「今日は」と言つた
り「サヨナラ」と微笑をかえした
りも出来る。その気持、人間同士
の憧憬といったもの、一人一人の
心の中にこの人間だけが持つすば

師走句会の兼題

句会ごとに、その題に苦しむの
だが、過去十年間に、どのような
題が出たか調べてみた。

27年度
「強盗」「売出し」「溜息」

28年度
「ヘボ」「修繕」「嘘」

29年度
「夜警」「雑音」「終点」

30年度
「ババ」「根気」「払戻し」

31年度
「恐縮」「網棚」「みそ汁」

32年度
「日本間」「食卓」「苦笑」「大
入」

33年度
「寒空」「鼠」「赤字」「宴会」

34年度
「口八丁」「足ぐせ」「ドライ」

35年度
「過去」

「煙り」「才能」「祝儀」「舌打
ち」

36年度
「ショック」「歯」「目尻」「覚
悟」

ここでエライもんだなと思つた
のは、毎年別に調べているわけで
もないのに、同じ題がこの十年間
にひとつもなかったことである。

あたり前だといつてしまえばそれ
までだが、ことしの題も、

「見切り」「日めくり」「失言」

「栄養」

となつてゐる。真向から歳末と
取り組んだ題もあるが、やはりな
にか気ぜわしい題ばかりであ
る。(F)



ひとくち

田中美喜子

東西ベルリンの形容しがたい不
気味な壁をどうしても通らねばな
らないのだ。ラジオの人生読本の
時間でのように言う。そこでそ
の壁に近づいて「今日は」と言う
と、警備の兵はやわらかい微笑を
かえしてくれる。

用事をすませて帰路又「サヨナ
ラ」と言つて別れを告げる。そこ
にはもうまったく表現しようもな
い人間の美しい心情が溢れて、何
ともいへぬ慕わしさが湧くのだと

語る。私はこの話を聞きなが
ら、人間対人間の交渉のすばらし
さに心打たれてしまった。

あの猛獣よりももっともつと比
較にならないほどの怖しい壁、こ
れが思慮深い立派な言語を持った
人間と同一人のなすことかとはど
うしても考えられない気持ちにな
る。けれど人間は元来多彩なも
の、時に慕わしく尊く、又或時は
うるさく気儘なもの。計り知れぬ
残虐なことも底抜けの馬鹿なこと

も出来るもの。そこに人間という
ものの解釈のむずかしさがある。
内省に内省を重ね、努力に努力を
積み重ねてもおそく人間探求の
到達点には達する事は不可能だろ
う。その上幾度会つて見ても新鮮
な興趣を湧かせたり、意外な発見
があったりもする。これ等のさま
ざまの人間像の提示を人々はもつ
と深く掘り下げて考える必要があ
る。若し人間はこの世にたった一
人置き去られたら気遣いになるの
も忘れてるのだ。どんなところに
どんな壁が作られようと一人一人
の人間は東西ベルリンの兵士の一
人一人の如く「今日は」と言つた
り「サヨナラ」と微笑をかえした
りも出来る。その気持、人間同士
の憧憬といったもの、一人一人の
心の中にこの人間だけが持つすば



三浦屋の春日野

富士野鞍馬

中將は其後も春日野へ通ひ

(傍二)

尾張の徳川宗春は、八代將軍自選候補であつたが、紀州の吉宗が將軍になつたので、その不平不満から、吉原三浦屋の春日野へ通つたという伝説がある。またその昔、在原業平は奈良の春日野の女に通つたという話もあるので、この二人の中將を春日野に結びつけて詠まれた句であらう。

吉宗が八代將軍になつたのは、享保元年(一七一六)であるから、宗春が春日野へ通つたのは享保時代ということになるが、その頃三浦屋に春日野という遊女は細見に見えない。しかし巷説は、春日野を根引きして外山屋敷に囲つたとなつてゐる。川柳もそれ

春日野がお客は名古屋山三也

(傍五)

春日野へしかも名高い一人客

(タル三三)

春日野は四ツ人リとい客を持

(七二七)

宗春の居城は名古屋であつたので、歌舞伎の「名古屋山三」と洒落、徳川御三家の筆頭であつたから「四人」とい」と詠まれてゐる。

大三十日春日野一人りうらやまれ

(タル六)

こういう最高の客をもつた

春日野は、大三十日も悠々として、羨やまれたであらう。

傾城は三人跡は遊女なり

(タル二二)

傾城(けいせい)は、城を傾けるという意であるが、高尾は仙台、またその後の高尾は姫路、この春日野は名古屋の城を傾けたと洒落、その外は傾城とはいえないと詠んで

いる。

御納戸金が吉原へ三度落ち

(タル二四)

前記の三大名は、それぞれ

の遊女を受け出した。「御納戸金」は大名の資金をいう。

(タル三〇)

春日野が腕に飛火の切り文

受け出された春日野の腕に

は、入ればくろがしてあつた

かも知れない。それを灸で焼

き消したのだらうと、余計な想

像までされてゐる。

宗春は、日夜酒色に荒み、

奢侈の極、鼈甲製の笠を冠っ

て吉原通いをしたといわれ、

それがまた川柳に多く詠まれ

てある。

(タル三三)

鼈鉾はばらふの笠へ透通り

「ばらふ」は鼈甲のことで、

「鼈鉾」で名古屋城——宗春

——を表わしてゐる。

春日の縁で結構な笠を召し

とも詠まれてゐる。

春日野の櫓は御笠の切れっぱし

しのぎの百本も出来る笠を召し

(タル五四)

春日野の櫓、竿も鼈甲製で

あるから、このようにも詠ま

れ、「しのぎ」はコウガイの

ことである。

春日野もかきの骨はどきしちら

る。

(タル五一)

し 春日野と傘をさすならきつい

の (七二)

傘をさすなら春日野はきつい事

(タル二三、三〇、拾一〇)

と、笠を傘に利かせても作ら

れてゐる。「さしちらし」は

カンザシ、コウガイである。

前に万治の頃、伊達綱宗

が、伽羅の下駄をはいて、三

浦屋の高尾のもとへ通つたの

と、宗春が鼈甲の笠を冠って

春日野へ通つたのを組合わせ

て、また多くの川柳が作られ

酒 清



灘・魚崎

大塚合名会社釀

ている。

鼈甲と伽羅は栄花の香冠

(タル四四)

たいまいと伽羅は栄花の香冠

(七二二)

「たいまい」は鼈甲のこと

である。

かさ下駄おつつかつ御大

祿 (タル二四)

名古屋は六十一万九千石、

仙台は六十二万五千石、両者

とも大祿であつた。

まことのけいせいかい笠や下駄

なり (タル二二)

ほんとに城を傾ける宗春、

綱宗であつた。

大きなどらば春の笠秋の下駄

(タル二四)

春は笠秋は下駄にてきつい事

(万天七)

下駄笠ではると秋との女郎かい

(七天五)

紅葉と鹿を笠で買ひ下駄で買ひ

(コリ三)

御放埒春は鼈甲秋は下駄

(タル三六)

春日野を春とし、高尾を秋

として、宗春、綱宗の放埒を

詠んでゐる。

春の日はてるのに秋はふり通し

(万天八)

はいたはふられかぶつたはもて

る也 (筥初)

御下駄はふられ傘はもてるなり

(タル四六)

高尾は綱宗をふり通した

が、宗春は春日野にもてたら

しい。

傘も下駄も三浦屋は派手なこと

(タル四六)

下駄の上にたたん事かたきは笠

(七二五)

どっちも豪華で有名である。

下駄笠につづき材木きつこと

(タル二二)

この二大名の後に吉原で豪華版は、紀の国屋文左衛門が、買切りをして大門をしめたことであつた。

春日野を落籍して側に置いた

宗春の外山屋敷は、十三万六千余坪という大庭園があり、その庭園には、東海道五十三次の模景があつた。

富士をいけどつてお庭へ五十三

(タル三二)

庭中に、余慶亭と号し、富士見の御殿というのも在った。

たいまいで御庭の雪の寸をとり

(タル二六)

ここでも鼈甲が詠まれ、金紋は外山の霞わけて入り

(タル五四)

その広大な様を、百人一首匡房の「外山のかすみ」を取って表現されている。

双六の絵図で出来たる御庭也

(タル二二)

お切戸があくとお庭の日本橋

(タル六〇)

と、五十三次が展開されたのである。その大庭園へ春日野をつれて散歩したのであろう

と、川柳はまた想像している。

先きたばこぼんでお妾庭へおり

(タル二二)

五十三次を春日野江戸で見る

(傍三)

陸尺にやの字の揃ふ御内庭

(タル五五)

春は目を出す双六の御庭也

(二一四二)

金紋先箱でなく、吉原の道中のように先煙草盆で、人足の代りにやの字に帯を結んだ腰元がついたであろう。

外山では箱根八の字などで越し

(タル一〇〇)

春日野は東海道を八文字

(二二六)

春日野が道中はんの八文字

(二二三)

尾州家のマークは八の字であつた。それをオイラン道中の八文字を踏むのにかけて詠まれている。

駒下駄で越すはお庭の箱根山

(タル四五)

うちかけで渡る外山の大井川

(二二三)

おやおやとまくるお庭の大井川

(二二六)

箱根山も大井川もこしらえてあつたようである。

一日に都へ上るいいお庭

(タル四四)

五十三次日帰りの御遊覧

馬駕も入らぬは江戸の五十三

(二五〇)

拝見に手形のいらぬ園を越し

(二四二)

川留めも手形もいらぬいいお庭

(タル五三)

雲助の無いがお庭の不足也

(拾一〇)

等々と庭園の状態も詠まれている。

なお春日野については「高尾追々考」に「春日野といふ遊女、此ころの細見記、三浦出みせのうちにもあることなし。これその実はあ

げまきなるべし。さてつら

つら按するに、宗春君此里

に入初給ひしは、享保十三

年の後、十四、十五年のほ

どならむ。さて此節三浦に

高尾なければ(小紫はあれ

ど)あげ巻を相方とし給

ひ、かの伊達候、その他の

諸候におとれりと、御心に

あかずおぼししより、揚巻

が禿しづやを高尾となした

まひ、十四五の頃まで御寵

愛ありて、さて榊原候にゆ

づりたまひしものなるべ

し」

とあるところを見ると、宗

春の相方は春日野でなく

揚巻であつたかも知れな

い。

續

川柳書架

(26)

誹風柳多留全集 上

★本書は柳界の聖典ともいうべき、「誹風柳多留」の百六十七篇全部を凸版で複製したもので巻頭に時の文部大臣鳩山一郎氏の推薦の辞があり、序は文学士山崎麗氏が筆を執っている。

★その次に、「柳多留全集刊行に就いて」を岡田三面子氏が書いていられる。

★本書(上巻)の目次は、初篇から五十六篇まで収められてある。

★昭和八年五月廿八日発行、四六版一七四頁。非売品。発行所、東京市神田区鍋町ビル江戸文化研究会、柳多留全集刊行会。

★本書の奥付に著者高阪太郎とあるが、これは誤りであることが、目次の最終頁に推薦、文部大臣鳩

山一郎。編纂顧問、帝大教授文学博士、藤村作。国大教授、文学士山崎麗。監修法学博士、岡田朝太郎。編纂委員、海野夢一。文学士、高阪太郎とある。文学士などが編纂に携ったとは見えぬほどの誤植が目につくが、本文は原本を凸版にしたものであるから、私達柳多留愛好者にとっては全く宝典に違いない。この書に、同時に活字句を添える親切さがあれば相当に出たであろうが、原本のままを凸版にしたので、一般には読みづらくて敬遠されたことはいうまでもない。もったいないことをしたものだ、しかしこれだけでもやっておいてくれたことは有りがたいわけだ。

誹風柳多留全集 中

★本書(中巻)の目次は五十七篇から百十三篇まで収められてある。

★昭和八年九月廿八日発行、四六版一八一頁。非売品であることと著者が高阪太郎となっていることは同じだが、本書の発行所が東京市芝区新橋六ノ六江戸文化研究会、柳多留全集刊行会となっている。



川柳と世相について

麻生路郎

大阪市立中央図書館の「著者は語る」会で二時間余りの講演をした。与えられた演題は「川柳と世相」だった。一般に川柳は世相を詠むものだと言合点をしているらしい。私にとっては余りうれ

も亦肯定するものであるが、それは川柳が批判詩であるからで、だからといって、川柳は世相を詠むものだと断定は当たらない。

つい最近、Y新聞で「川柳世相展」なるものを百貨店で催したが、これなども世間一般が、川柳は世間を詠むものだと言合点をさせるものであって、ホントの川柳家にとっては有難迷惑な話である。

では本論に移ろう。

現在私たちが短詩と称している範囲の詩、短歌、俳句、川柳は何れも叙情詩であって、世相を目標に作詩しているわけでないことは私が言うまでもなからう。

しかし、詩、短歌、俳句、川柳を通視した時、その作品の上に最も多く世相が流れているものとして、川柳を第一に推すことを私

思う。

多くの時事吟の中に、稀れに秀れたものがあるように思えても、世相を詠むことを目標に作られたものだけに、いつのほどにか影の薄い句になっているものである。

私も曾てO新聞社から頼まれて時事吟を作ったことがあるが、文学的価値のある時事吟なんて、そうザラに作れるものではない。

その一例をあげると、はじめて自動車強盗によって運転手が殺され橋上から川中に投げ込まれた時に、私は公憤を感じて、

霊あらば化けて出てやれ運転手
という句を作った。句稿をとり
に来た記者がフンとうなづいて、
自分の乗って来た社の運転手に見
せたところ、運ちゃんも感歎の声
を放った。それが掲載された時に
かなり好評だったし、自分として
も相当の自信のもてた句であつた。
今でもこの句のいのちはある
にはあるが、自動車強盗のひん
ぱんに行われる今日では穿ち味は
あっても、この句に対する感激は
さして大きくはないのである。こ
の点からいっても、読者から募つ
た時事吟の多くは、単に世の出来
事を十七字型の作文にしたという
に過ぎなくて、ホントの川柳から
は遙かに遠いものである。
であるから、私は「川柳と世相」
と云う演題をもらって、「川柳に表

川柳のタネ

——自家用に乗れば——



吉田圭井堂

すると今度は後ろのボデーに
「新米ですから御注意」となり、
「免許取り立てに付御注意」とな
ったかと思うと最近、
「コラーツ白バイ無用」
「白バイごめんね」と大分醜態に
なつて来た。また最近の傑作では
「速度違反三回、目下遵法運転中
に就追越して下さい」と違反件数
を堂々と書いて走っている車があ
ります。朝から晩まであくせくと
血眼になって働いている都会に何
となく微笑しいこんな風景を覗て
いると生命が伸びるように思いま
す。

私は朝八時に家を出て店まで二
十二キロ、夕方判で押したように
四時半に店を出て帰るといふ、
特別の用件がない限り、毎日同じ
道を同じ時間に同じ速度で走つて
います。私は神経質の故か車中で
本を読んだり新聞や雑誌も見ぬ性
分で、従つて川柳も余り作つた事
もなく只ぼんやりと外の風景を見
ているだけですが、今から二三年
前までは車の数も少なく信号も余
り無く何だかのかんびりしていたよ
うです。フト見れば追い抜いて行
く車は主としてトラックですが、
進行に向つて左後ろのボデーの隅
に小さな字で「お先きへごめん」
と書き同じく右後ろの隅には、
「お先へどうぞ」と書いてあつて
つい吹き出させたものですが暫く

陸橋の降り切つた所は必ず無番
の踏切があるもので注意の上にも
注意すべきだが平気なものです。
前者は年寄りに多く後者は若い運
転手に多いようです。
鼠取りといふスピード違反
をあける有線の機動部隊に次から
次へ引つかかっている。鼠取りに
かかる鼠のように又それを反対側
から走つて来る車の運転手が

われた世相」と解して話をすすめることにしたのである。

しかし、同じ世相といっても、元祿や宝暦、明和時代の世相は、文化文政時代の世相とも違うし、明治時代の世相は大正時代の世相とは違う。同じ昭和の世相といっても、第二次世界大戦の戦前、戦中、戦後の世相ははなはだしく違っている。それは人情、風俗、習慣、社会制度の相違による世相が句の上に異なった匂いと味を持つからである。だからそれ等の各時代の世相が流れている句を抽出し、取材の相違せるもの、類似せるものについて解説することは、とても僅かな時間では述べられないので、江戸時代の句を二句、大正時代の句を一句、他は昭和時代の句を九句例に挙げて、それ等を解説し、川柳に流れている世相がどんなものであるかを知ってもらふことにしたのである。しかしこれ等も、はじめから世相を詠もうとして詠んだのではなく、詠んだ句に世相が流れているのであることを附け加えておいた。

ではどんな句を例示したかを五、六句掲げておくのもムダではあるまい。古句では

乳貰いの袖に突っばる鯉節
ミルタのある今日では、もう斯うした情景は見られそうにもない。たとえ一時的な乳貰いが行なわれるとしても、「袖に突っばる

鯉節」ということは無い筈である。

昭和時代の戦中、戦後の句で

奥さん奥さんとかつぎ屋同士なり
（春葉）

戦後の句では、

牛肉屋のおっさん理事の名刺くれ
（栗）

を挙げておこう。前者はかつぎ屋の生まれる世相だったし、後者は物資の不足から、さかんに組合活動が興った世相がうかがえる。

二人目が生まれ此の次どうしよう
（いわを）

の句を見ると、生めよ殖やせよの国策時代に九人の子どもを抱えて産児制限をうけつけてもらえなかった私等夫婦にとっては隔世の感がある。世相の相違というものは、こんなにも違うものなのだ。

いつからか男の方が子を抱いて
（雄声）

戦後派の男女は斯うした方面から見て、

全く違った世相の中に生きているといわねばなるまい。

火を踏んだようにツイストきわぎたて
（愛鳩）

にいたっては私たちは、もう何も言うことがない。世相の変遷は斯くもあわただしいのである。

しかし、これ等の句は、初めから世相を詠もうとして詠んだのではないことはいうまでもない。やむにやまれぬその人の随感随想なのである。そしてそれ等の句の中に、世相が流れているのだ。だからこれ等の句は所謂時事吟として扱わないのである。

私は最後に、私たちのホントの川柳について語ることが忘れなかつた。いや寧ろ、それが話したいために講演を受諾したのであった。

ではホントの句とはどんなものが、二、三例示することにしよう。

女なる悲しみ女酌をする
（梨里）

この句は戦後、眼ざめた女の男性に対してのレジスタンスを詠んだものであることは説明を要しないであろう。

仏壇へ頭をつけて敷く寝床
（風船洞）

ほとけさんの着てた布団でねるとする
（同）

夫人を喪った作者の連作句の中

から抜いたものであるが、夫婦愛のなみなみならぬものを痛切に詠っているではないか。

斯くの如くにして私の講演は終

ったが、川柳の一面をのみ見て川柳は世相を詠むものだという観念は一般の人々のアタマから是非共除去してもらいたいものである。

「やっているぞ」

と白昼ヘッドライトを点滅して知らせてくれる。心得たもので

「有難う」とこちらも運転手に手をあげて礼を言っている風景。

「これだなア」と鼠取りの関所を過ぎて速度を出したト、タン、第二の鼠取りに引っかかるよう警察もなかなか芸がこまかい。それもうまく無事に抜けてヤレヤレこれで大丈夫と、スピードを出した矢先第三の鼠取りが据えられている。これには大抵の者が引っかかる。上には上があるもので、民警互いに攻防の限りを尽していること、微笑ましくも涙ぐましい有様です。

私の車も運転経験二十七年無事故のベテランで大臣賞知事賞に輝く運転手が最近商用で京都へ行った帰り、大阪で逢う人がある

「時間までにそこへ行けるか」と私が聞いたところ「大丈夫でしょう」と言っている間もなく鼠取に引っかかった。

違反超過十キロ三で罰金五千円を初めて納めた。その時機械を据えて民家の裏手にかくれていた警官が

「実に惜しい全く残念です。これ

が十キロ以内ならなんとか見のがせたのですが、十キロオーバーでは手の施しようがありません。お

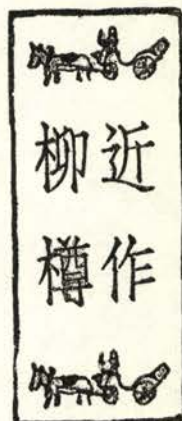
気の毒ですが貴方が確認して下さい。

い。このキカイに数字が出ていますから」

何んだか馬鹿にされているようですが「こらさきまー」とやられるよりは気持ちが悪くないと運転手はこぼしていました。それが五キロオーバーでも「残念乍ら五キロオーバーでは」と言うかも知れません。

踏切の一旦停車にしても物陰にかくれて恰も鰻が穴から餌を待っているように違反するのを待っているかと思うと、一旦停車はするが左右を一切見ぬという勇敢なのがいます。先日バスが踏切で一旦停車し女車掌は態々降りて先に渡り誘導したに關らず、電車と衝突し多数の怪我人を出しているなんて、どこをどうみていたのか、女車掌の話では、左を見たが右は見なんだとのこと、運転手も御念の入ったことに同じだったらしい。こんなことが街にゴロゴロしていて川柳の種もなかなか尽きそうでない。

違反運転手が罰金を納めに裁判所へ行って、列んで待っている人数を数えて今日一日で百九十六万円はかいた等と、計算している陽気なのもあれば、検査した奴を七代かかって呪ってやると、物騒なのや負けても呉れぬのにペコペコ頭をばったのようになげ放しもあり、検べ官と頭から喧嘩腰のあんちゃん等、皆さんも一度関があれは見学することです。下手なドラマより面白いです。



麻生路郎選
北川春巢選

秋草は女が折ればなまめかし 芹屋市 里田一十
白バイにつかまり客はほっとかれ
いつまでも暑し夾竹桃憎し
虫供養もつともらしく香も焚き
経らしいものも読んでる虫供養
キャパレーも注連縄はって秋祭 竹原市 杉原愛鳩
派手 ちやうど 云ったら妻の氣に入らず
滋養より休養せよと医者が云い
身ごもっていても挙式のおごそかに
ゴルフ場見学小便してかえり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

もてもてて百姓するのが嫌に なり 石川県

前田百万石

義理がたし酔わぬ葉をのんでまで

同

人気歌手の親の性格まで変り

同

スキヤンダル続く人氣もまだ続く

同

お手伝さんのおかんむりには はらばら

同

それ以来千円札の指ざわり 京都市大久保 和三部

十円の善意で靴が軽い羽根

同

メンデルの法則守る子を叱り

同

やっと帰る気配へ妻がお茶を代え

同

終幕へスリもシーズン回顧する 枚方市

宮川 珠笑

成金の過去は問わない主義を持ち

同

秒よみに入った挙式十日前

同

いんぎんにスリも来店感謝され

同

樟脳を匂わせ菊人形へ行き 西宮市

白石 良圭

秋の夜のとなりのテレビ聞えて来

同

すぐ捨てる恋はGパン穿いて逢い

同

肺病んでいてもやっぱり十二月

同

五十年経って五十になっただけ 鳥取県

鈴木村諷子



時事川柳に

ついて

直原七面山

時事川柳は段々下火にはなつて来ていますが、まだ作っている人はあるようです。

当岡山県においても、時事川柳でなければ川柳ではないかのように言つて、ほうほうをかけずり廻り、その上自分も、夕刊新聞に、句を発表して、悦に入っていた人もありましたが、どうしたかげんか、最近、その人の口から、時事川柳の時の字も聞かなければ、発表句を見ることが出来なくなつてしまいました。

もともと時事川柳は、川柳本来の姿ではなく、全く異質なものであります。

作品自体を見ても、文学的に、さほど価値あるものでもなく、無論、いのある句からはほど遠いものであります。

九月のよみうり川柳瓦版に、金星氏の

「京の寺大文字より先に焼け」と言う句が載っていますが、この句を読んで、共感を覚える人が果



太陽を相手に嘘のない暮し	同	懷疑まだとけず左遷の地で過し	同
媒酌をしてやったのも孫が出来	同	悪魔とも手を切る家裁の門くぐる	同
夕焼へ紅いレールの遙かなる	同	つまらないお祭り父ちゃん酔いつぶれ	山内 静水
ミレーには済まない落穂ふんぞ捨て	河原みのる	自分を偽り他人の目にきれいに	同
六十二才結婚式に列す 一句		セールの自由ひる寐もしに戻り	同
青春の血が騒ぐよでさわぐよで	同	お隣の香料までが気にかかり	遠山 可住
台風もこねば来ないで拍子抜け	同	免許証とれたばかりに早死し	同
葱の青内助の妻のように添い	同	藪医者やけどお隣にある強み	同
田圃まで売って町議に落選し	南 伝一	ガンセンター工事完了淋しけれ	小川 静観堂
なやみ事まぎらすための馬券買い	同	巫女の恋そんな話もあるやろな	同
耕耘機買って温泉へ招かれる	同	鯛網の客へ河豚鳥賊のエキストラ	同
猫の名を呼んで夫へ返事せず	伊丹柳瓢子	商談の出来た夜道を虫が鳴き	大洲 大八洲
バチンコへ根気も金もよう 続き	同	姉女房足の裏まで拭いてくれ	同
あわてねばよかった松葉杖に泣き	同	解放感魚信あろうがなからうが	同
温情があつて課長は左遷され	安藤 桂仙	花束のやがてはゴミになるさだめ	嶋野 ひとし
工場に福祉相談出来てひま	同	ご破算してご破算してガムを噛み	同
愚痴聞かす手土産提げて里がえり	同	スタートは一緒酒になり酔にも	同
定年退職無声映画の如く消え	内藤 喜夫	汗だくで秋のモードを見てまわり	末沢 花美

して幾人あるでしょうか。

この句が判るのは、京都の壬生寺が、精神薄弱児の放火によって、完全に焼失してしまったという事を知っているほんの限られた人々だけではないでしょうか。

それ以外の人々に取ってこの句は、全く無価値以上のなものでもありません。

またたとえ、この句にいたく共感を覚えたとしても、事件に関する記憶がその人達から薄らいでゆけば、この句の影もだんだん薄らいでゆき、記憶が消失すれば句も同時に消失して、句は完全にいのちを断たれてしまします。

しかもその上悪いことには、句主金星氏自身の脳裏からも、やがてこの句が完全に忘れ去られてしまふと言ふことであります。

いわば時事川柳は、太陽の光りの中にさらされた淡雪の一片で、

年

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



嫁ぐ娘が居て秋の情緒に親しめず	同	家賃とる身分になつてけちになり	同
白菊を活けて別れの部屋となる	同	デスク一つそれでも名刺にビルとあり	同
隣の子の分も家の子を叱り 島根県	景山 綾美	工場の音にまけるな虫の声 大阪市	福島美津子
日旺の素足に土の温かさ	同	読まず書かずいつか落葉の道と なり	同
課長の盲点犬を賞めておけ	同	出世せぬ課長部下にはしたしまれ	同
乳母車の風船逃げた天高し 兵庫県	常岡 孝風	鉄屑の下もコロギ同じ声 大阪市	吉田 季生
手さぐりの青春明日を信じよう	同	世も末か寮まで邪教やつてくる	同
取り入れを、 き 気で嫁を取る日取り	同	人ひとり殺した機械また動き	同
みち足りた寐息を立てるじれつ 岡山県	永宗 宗義	切手なと買つて オレ ビックに協力し 鳥取市	近藤 昭夫
回診の時だけ病人の声を出し	同	カマトトじゃないかと純情疑われ	同
油気の抜けた妻にて支えられ	同	十二月ここでも色気のない話	同
会計は幹事にまかす手をたたき 鈴鹿市	吉田 俊和	血沈を金苦病苦がくるわせる 青森県	岩淵 一星
恩給がついてて昼の碁を囲み	同	まだ独りなり四ツ珠の女事務	同
悪い知恵つける雑誌を読むも閑	同	中風も敬老会へ行きたがり 兵庫県	斎藤たけお
つきつけてマイクへ咽鳴吸いこ きせ 京都市	小黑 王石	老人ホーム歩いて行けぬ ミ に建ち	同
貧乏も映画になれば美しく	同	張った乳房帰ってやれぬ農繁期 和泉市	末田 晃康
月給の順にならんで無礼講	同	刈入れどき牛や鶏ひもじかる	同
ツイストはオルガンに合う曲でなし 大阪市	堀 風仙洞	ネクタイをきちんと締めて愚連隊 神戸市	吉田 隆史

とても人口に膾炙される暇なんかあったものではありません。

あれ程盛んであった時事川柳も、こうした句自身の持つ暗いはいかない宿命から、やがて自然消滅の日を迎えるに違いありません。

たとえ句のいのちが、線香花火的であっても、それはそれで良いではないかと言えはそれまでのことですが、それは心ある作家のとるべき道ではありません。

まして川柳作家の最大最高の使命と目的が、いのちのある句をものすることにあるとすればなおさらのこと。

時事川柳の一日も早くなくなることを、私は心から祈って止みません。

選に命を

名ある川柳大会の句報が届いたので、一句一句興味をもって読み進んで行くうちに、私はふと妙な気分におち入った。

それはどう見ても川柳とは受取り難い句がそこに並んでいたからです。

仮令大会における忙しい選句であつたにせよ、選者は一応名の通った川柳家ばかりで、しかも中には川柳教室の講師などをしておいでの方もおられたのですから、相当見応えのある選句が出来てお



どこをどう金撒き散らしマツチため	同	自転車でネオンの海を行く孤独	同
借り衣裳が澄まして Tee プ ルビーター 笠岡市	松本 忠三	涼しさは先ず木の葉から落ち初め 松山市	河本南牛史
中元で貰うたシャツまで子に着られ	同	釣竿を持たぬを悔む磯に出る	同
信じてはみたいが酒の上の事 羽曳野市	福井与太郎	稲刈がすんで疲れた村となり 仙台市	平野 光道
二次会の肴人事が移動する	同	つるし柿子のなき家に陽をはじき	同
くたびれた服にもひらひら赤い羽根 羽曳野市	岡本紀太呂	昇給につながっていたかくし芸 豊中市	稲増 久雄
レジャーを聞かれて寐 てる る云えす	同	虫も殺さぬお顔がゲテものを喰い	同
金溜める趣味でズボンに折目なし 高知県	山川 勝子	産声でいやおう なし にお祖父ちゃん 大坂市	宮尾あいき
よだれ掛け贈って古稀に叱られる	同	高校風景	
銭湯を嫌がる旧家の嫁貰い 大坂市	万代句念坊	二時間目に昼食食べても自由です	同
元金を返すを上部と云われ	同	常逮の僧は背広へ袈裟をかけ 京都府	西村句楽坊
若妻は赤んぼの手でバイバイし 会津若松市	住吉 貞坊	仏より人間様が待つおはぎ	同
ワラよりはチトはましだろ クジ を買 う	同	手のうちを読まれにせ札増 えて 行き 大坂市	田中 敏行
醤油瓶 浅漬の味母の味 玉野市	小谷 仙山	よれよれの紙幣これこそニセな う	同
何事ですかと季節はずれの大掃除	同	職退いてからふりかえる処世術 愛媛県	村上 石峰
山の美を究むに髭ぐらい剃って ゆけ 京都市	都倉 求女	出稼ぎのヒット氏神様へ寄附	同
遊ぶことばかりに学割証使い	同	馬鹿らしい金と思えど組合費 宮崎市	野口卯之助
家計簿の赤字確認して閉じる 出雲市	中川 晃男	仕末書を書かす巡査になだめられ	同

らなければならぬ管なのですがそれがそうでないので私はがっかりしてしまいました。

そこでために、私が最近考案した川柳撰別器にある選者の句を掛けて見ましたところ、大半の句が没句になってしまいました。

そこで、こうした盲選だらけの句報を読んでいると、読んでいる自分の方の顔が赤くなってしまいました。

それ程川柳に値しない句がその句報には多かったのです。

で、こうした盲選が始終繰り返えされているとしたら、他の川柳作家がいくら努力してみても、川柳の普及はおろか、川柳が軽視されるのは当然のこと、大衆は川柳を理解しないなどとうそぶくのはこれは全く的外れと申す他ありません。

味 の ヒー

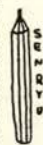
モダン 川柳

心 斎 橋 大 丸 北 の 辻 東 へ

御 門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい





口下手の緊張頭下げるだけ 玉島市

井上 旭峯

叱る父内緒で漫画見てる父

同

公休も胃袋だけは酷使され 大坂市

田中 浪満

ねたい時ねれる一人の旅もよし

同

生花の曲ったところが個性なり 松江市

岡崎 雪美

浮世から逃げて悟ったつもりで居

同

マルの口髭ちよこんと残しとき 河内長野市

森本黒天子

二号にも経済情勢など話し 大坂市

伊集院 良

移り気を封じるお百度知らぬ夫 東本市

高木繁太郎

自白より指紋がほしい捜査陣 七尾市

松高 秀峰

新しい俵を積んで妻と飲み 羽野市

三宅 ろ亭

倅せは百面相で子をあやし 遠野市

鈴木 二文

こいさんの恋庖丁に見まもられ 羽野市

古川 静波

妹への土産と笛を二つ出し 大坂市

山地 判志

誘惑をされてもBGのはジュース 神戸市

波多野 美由起

かくしても出る常識がお茶を飲み 玉島市

水粉 千翁

出張の日付のばした後楽園 市島市

古谷まさる

手のひらで掬いハイカー水うまし 大坂府

谷口 艶子

二人来てコーヒ一つで恋語る 大坂市

豊島 貞夫

オッサンの愛称のまま平社員 大坂市

西本 保夫

齡当てて保険の口が一つ取れ 西宮市

沖吉 照児

あの年で両親のある幸わせさ 竹原市

脇坂 笑顔

棧橋へ異国の香りばらまいて 堺市

高寺 和郎

新築をしても子供等住みつかず 笠岡市

谷本鈍愚坊

秋祭り背中の竜も御輿昇く 大坂市

和田 旋鳳

甲斐性があるから酒をのむという 松江市

岡崎 祥月

なりきったつもりの馬鹿になれた 川崎市

赤池 五朗

土工のぜいたくムシロの上の昼寝 八尾市

吉田 博一

亀にふをやるも彼岸の天王寺 大坂市

山田 蛙水

勉強の為外人に話しかけ 西宮市

鵜飼 鮎子

お祭り太鼓紳士ばかりが寄って食べ 玉島市

田辺 好女

慰謝料がとれたでうらやむ第三者 竹原市

森井 菁居

アメリカのお嬢英語がよく分り 姫路市

隠岐 不酔

残念でした大器晩成さん 福岡市

小田 無限

お月見は今宵だってネエコップ酒 金沢市

根上 杏花

アパートの秋刀魚火事かと思う 大坂府

石田 新石

川柳雑誌社特製
書きよい 美しい

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)二〇円

そこで私は、それらの選者の方々に向って、〃一体あなた達は本気で、否真剣に選句に取り組んで下さったのでしょうか?とお尋ねして見度いのです。

あなた方はいずれも、相当長い柳歴をお持ちになり、しかも他より秀れた観賞眼を一応は備えておいての筈ですし、それぞれの地方においては、一門の川柳指導者として名を成し、自他ともに許しておいての方ばかりなので、こと川柳に関する限り、その責任の重大さは充分心得ておられる筈です。

しかるになぜこのような、他から〃これが川柳なんですか、こんな馬鹿げた句が〃などと指弾されるような選をなさったのでしょうか。

しかし、もし各選者の方々が、〃あれが私達の勢一杯の選句なんだ〃と神かけておっしゃるなら、私は心の底から川柳なんて馬鹿らしいもの、川柳なんかこの世の中から消えて無くなってしまうと声を大にして叫びたい。

どうか選者の方々は誰れによらず、命をかけてもっと真剣に選句に取り組んで貰いたいものです。



歳末の句

・特集・

寒い風、あわただしい足音。しかしそんな中にも商店街だけは活気づく。サテ川柳人の歳末は？ またどんな句が印象に残っているか？

早や歳末

中島小石

この間、年賀状に書く句をやっ
と考へて出したと思うのにもう年
末、こうも一年が早くすぎるもの
かとあきれ返る。私など毎日毎日
主人の用事、子供の事、孫の事、
その上診療所の手伝いと白い紙を
並べたり、たたんだり、とつづけ
ている間にすぐ一年がすぎてしま
う。もうその中に頭も白く、老眼
鏡もかけ入歯になって、最後には
古方先生のお話しではないけれ
ど、ハコに入る日が近づくのでは
ないだろうかと思ひいかにぎり。

戦後は世の中もずいぶん変わっ
てしまひ、あわただしい中にもゆと
りのあつた昔の行事もだんだん影
をひそめてゆき淋しいような気が
する。事始めというような事も今
は色街だけが残っていないよう
である。私のところの思家の奥様
で何としても御歳暮の一番乗りを
しないと気のすまない方があつ
て、毎年事始めの朝方一番に御歳
暮を持ってやって来られる。

看護婦達と今日は事始め、もう
そろそろ来られるよ、という口の下
から玄関のベルがなる。ちゃんと
やって来る。ところが此頃はデ
パートあたりの宣伝がきいてきた
せいか十二月一日の朝となると必

ずやって来られるようになった。
今に十一月の中に来るようになり
はしないか等と口の悪い事をいつ
て笑っている次第。そして私の家
の年末もこの頃から始まるという
事になる。

ため息が十二月という顔に
なり
生々庵

年の瀬に道頓堀もつめたそ
う
烏耕

どうやら今年は大分金づまりと
か、いろいろ寒々とした話が多い
ようになってきている。

十二月うれしい風も少しふ
け
路郎

どうぞこんな十二月であつてはし
いな一と思ふ。

どこのお宅でも女は一しお年末
は用事が多く年の瀬が迫ればあれ
もこれもと年内に片づけておき度
いとあせくする日がづく。

私も御多分にもれず年末の忙し
さは時にはお手洗にゆく間もおし
い程、代りにいつて貰いたい位の
日も出てくる。

年忘れ、忘れられないあれ
とこれ
生々庵

大晦日はあくせくせず一年の
思い出を皆で話してもするよう
に、だんどりよくしておけばいい
ものを、と主人から叱られるが
も、最後のどたん場まで忙しい思
いでいよいよ元旦の用意もやっぱ
り大晦日にならないと出来ない有
様、今年も亦、

おなますをきぎむ手許へ
除夜の鐘
小石

こんな事になりそうである。

貸し借りもなく湯豆腐の大
晦日
生々庵

貸し借りこそないけれど何時の日
にか湯豆腐の鍋をつつきながら、
静かな除夜の鐘をきけるような大
晦日を迎える事が出来るだろう
か、それこそしわくちやの白髪頭
に総入歯でもごもこと豆腐を中
に差向いで座る日の事になりそう
である。

歳末の50銭玉

野村味平

歳末よ陽気な風も少し吹け
味平

私は、今年で五十八才になった
が、正直なところ、かつて、大ト
ラになれるような景気のよい歳末
を迎えたことが、今までに、只の
一度もない。小さな骨とう商を営
んでいた親父が、死んだのは、私
の十才の十一月末のときで、子供
心にもうんざりするほどに借金を
残して呉れたことを、おぼえてい
る。

それから十カ年という年月日
を、気丈夫な私の母親は、八方に
拝みたおしをして、この借金の
返済に身体を粉にして働き通した

もので、そんな最中に、落ち目が
祟り目で、亡父の筆蹟までも真似
た借用証文までも持参するような
不心得者までが現れる始末で、薄
情も甚だしいものであった。

親父の亡くなった翌年の歳末の
こと、ビイビイの貧しさで、途方
に明け暮れている母親を見かねた
私が、亡父の使い古した商人らし
い、洒落た折疊式の財布を珍らし
げにいじくり廻していると、中味
の破れからポツタリと五十銭玉が
一つ転がり落ちた。このときアラ
と言ったきり目を見張った母親の
不審がった顔と、私のうれしけれ
たことは勿論で、一生忘れること
の出来ない、私の生涯で、一番
のうれしい出来事の思い出の一つ
である。早速この五十銭玉を仏壇
に祭って、拝んでいた亡母の姿
が、今も私の胸に強く浮かんでは
ない。

忘年会

あたにかい
すき焼と 鍋料理

もみじの名所

竜田大橋下車

電話竜田一六二

料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い

竹青の店

生来、健康で育たなかった私は、亡母の念願で、安給料生活者としての一生を終る身分になった。親父の失敗を、いつまでも心にざざんだ亡母は、どうしても私が、飛躍的な職業に就くことを好まなかった。

去る九月十二日に勤め先の用件で、私は山代温泉の百万石ホテルで一泊した。その翌朝、洗顔の際に相当な喀血をしたのである。どこから出た血なのかとも医者にも知らさずいたのであるが、先日、お伺いした折りに光郎さんだけには、お話をして戻った。この光郎さんのご子息の若先生からは、ずっと私は、心臓病、低血圧、不正脈の治療をうけて、暑さと共に苦しみ通していたのであるが、医者からも面倒な身体だといわれながら、現在では、これに加えて、もっぱら胆のうと、へ虫（ヘイローゼ）に苦しめられて、勤めも半分ほどにかたづけ、一日も早く病を克服せよと努めているのであるが、先日、これも生来健康でない愚妻から、私より先きにトウさんは、死んではいやだと泣きつかれて、男泣きに共に泣かされたが、この愚妻だけには、私が、先きに死んでも、一生、喰うには困らない物を残してどうぞやりたいものをと念じているのである。

これも先日、出入り先の薬種商の女主人から、あなたの今の身体

の様子から判断すると、この先は、五、六年は大丈夫生きることの出来る程度だと、保証せられて戻ったよと、知人に語ったところ、売薬屋のババ風ぜいが何の人の寿命までが判るものかいと、カンラカンラと笑われて仕舞ったが、はたして、この不幸な私の愚妻に、一生を安楽にさせてやれるか、やれないかの天命を賭けた男の歳末とはなったのである。

内閣恩給局の親心

木村千容

十二月 恩給局の親心

千容

恩給の四三四半期の支給期日は、翌年一月六日であったが、同受給者就中旧法適用者は、概ね、老齢で、其の支給額も低額である関係上、支給期日を首を長くして待つて居る層であり、殊に、年末には相当困窮するものさである。

そこで、支給官庁である内閣恩給局が、親心で、支給期日を一カ月繰り上げて十二月六日と改め、昭和三十四年度から実施された。私を含めた、受恩給者の福音と謂うべきである。其の感激を句にするために、実感を盛りこんだものをと念じたが、ついに自分には分るが、人には分りにくい句に

なってしまうことは残念であった。

それが、翌三十五年川柳雑誌三月号で、私の句に発表され、この時事吟見たいな句も、毎年十二月が来ると、難産だった、苦悶の印象に残る句であることも嬉しい。けれども、これが常識化すれば、忘れてしまいうだろうことを怖れる。

恩給受給者の平均受給年月は、昔は三年半といわれていたから、私は早や、その何人分をも受給されている。（人のぶに生きてるようで勿体ない、旧作）この点でも、有り難いことと感謝している。

印象に残る

歳末の句

杉谷湖山

十二月借られる心配して見たし 一三夫

私の幼少のころ父の病臥中、遠縁の者に印鑑を盗用されて、田畑を売り飛ばされ、その上、莫大な借金を背負わされていることがわかり、親族会議等で善後策を講じたが、名案もなく、いつ果てるやらわからない有様でした。

母はいたって物わりのよい人で、その人をつつき出しても、金や田畑が返えるわけでもない、じつところらえて目をつぶってしまつた。私たちに苦汁をのませたその

人は、精神的呵責に堪えかねてか、朝鮮とかえ逃亡したそうだが異郷の地でさびしく亡くなったということでした。

年末になる
と、借金取りに
対応する母の姿
が今でも目に浮かぶのです。それからというものは子供心にも、なんとかしてやろうと心に銘じつづけてきたが、まったく金に縁がないものと見え、少し出来るとはかの方へ、スボツ、スボツと飛んでいく。いったいいつになつたら、

借られる心配
——に到達する事やら心もとない事です。歳末の句の感想が、なんだか面映い私の秘密の告白めいた事になりました。

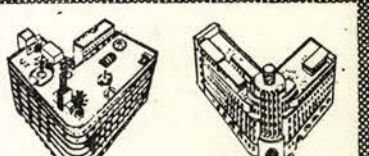
善人の足を師走の風が追ひ

緑之助

師走の句

西田柳宏子

これ小判たった一晩いてくれろ
（古句）
この句を余り金に縁のない私に



「お買物」は近鉄で!!

アベノ上ハ
近鉄
アベノ77-8331
上ハ77-3331

しみじみ実感を湧かしてくれるのも師走であらう。然し乍ら毎年、毎年、の師走にこのような感じのする切実な句が多いのも矢張り特色の一つであらう。

十二月 一万円がクシャにな

豆秋

スリにでもなろかと思う年の暮
出来るならドロロンがしたい
十二月 一念

借りたのを払えど貸したのがとれず
涼髪

然し乍ら矢張り年末という、慌しさ、気の急ぐことをものにしたのが目をひく。

師走月走りたいのはこっただす
光輪

年の瀬を犬までこぜわしく走り
肅佑
十二月電車やバスを待ち切れず
豆秋

そうした慌しさや、こぜわしい中にも

十二月儲けない身のひまな

こと 一 瓢

年の瀬を小さい夢を抱いて

こし 千 容

十二月待ってましたとのんだくれ 一念

宴会も仕事の内の十二月

など金廻りの良さそうな方々が愈々押しつまる頃にもなると、世間に鳴り渡るのが

クリスマススイエスに済まぬこともする 阿 茶

金使え金使えジングルベルが鳴り 一三夫

火事と事故増えて年の瀬らしくなり 水 洞

このクリスマスの一画には、敬けんな本当の聖夜を過す人々、

聖夜の餐神父の靴は常のま 薫風子

ともあれ今年も亦年末がせまってきた。世間は同じような小景を展開することでしょう。

善人の足を師走の風が追い 緑之助

爪切れば爪は師走の音で飛び 灯 竿

チンドン屋師走の人に追越

され 青 明

そして又今年も 女房にやりこめられる十二月 水 堂

誰が買う数の子かしら売っている 望 峰

百貨店ついでに数の子拌んで来 左 文字

数の子が高いかそうか買わんとけ 没 食子

などが私の周囲をとりまいていそうである。でも小市民としての平和な生活の喜びは

一年の回顧今年も無事でし 柳宏子

た

あわただしさと

金づまり

金井文秋

十二月みんなが走るからわたしも走る (作家不詳)

十二月の句といえは、あわただしさを讀んだのが非常に多い。ふだん落ちついている、いや落ちつ

いていなければならぬ師も走るというところから師走の異名もあるくらいだ。

この句も二十年以上上の句だと思ふが、いつまでたってもこの感じだけは変らないものだろう。そ

の証憑に毎年十二月ともなれば、どの柳語にも若干の句がお目見えする。しかしどの句も大同小異で月並の域を出ないものが多いが、この句だけが印象に残っている。

私が川柳に手を染めた当時に覚えた句であるのと、破調で字余りであるのが、かえって印象を深くしたのかも知れない。どちらにしても名句であることに間違いない。

頼母子をあぶなく落す十二月 夢 路

ボーンヌ景気いい風の吹いている家庭もたくさんあるが、また反面では金づまりで苦しんでいるものもいかに多い事か、妻や娘の鼻声にドキンとするのも十二月、お金の事で夫婦喧嘩をするのも十二月、借金取りに三押九押したり、逃げまわったりするのも十二月、いかにして年の瀬を越そうかというところに随分悲喜劇があつて落語のネタなんかによく使われている。とにかく越してしまえば、

元日や去年の鬼が礼に来る (古川柳)

どうにかなるものだ。しかし出来るならば大三十日まで支払いも全部済ませ明るい正月を迎えたいのが人情だ。そこで街の金融として生れたのが頼母子講で、田舎ではまだ盛んだが、都会ではだんだんなくなりつつある。頼母子はやつた事がないとい

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

現代柳人録

う人も大体は知っているだろうから説明はさけるが、この句も初心者の頃に深く印象に残った句で、今ではやや古くなつてはいるが、私の好きな句の一つである。

(五) 昭和3年5月21日(六) 朝鮮平安道鎮南浦府竜井町(七) 銀行員(八) (九) 正しいとつねに正しいとはさみし(一〇) (一一) 有(一二) 昭和二十九年五月

(171) 西 川 晃

(一) 姓名(二) 雅号(三) 別号(四) 現住所(五) 生年月日(六) 出生地(七) 職業(八) (電話) 九) 自信の句一句(一〇) 川柳以外の趣味(一一) 配偶者の有無(一二) 川柳に手を染めた年月

(169) 小 川 恒 明

(一) 小川恒雄(二) 小川恒明(三) (四) 大阪市東住吉区田辺東ノ町七丁目三三(五) 大正7年11月7日(六) 大阪市(七) 造花商(八) (七九一) 二八六五(九) 巢立ちする喜び眠れないんだ(一〇) 観劇(一一) 有(一二) 昭和十六年四月

(170) 小 野 公 樹

(一) 小野公樹(二) 小野公樹(三) 公樹(四) 岩手県盛岡市上田字古道三三ノ二八

十月号「現代柳人録」辻圭水氏の句「もう船が見えぬにテープ持ったま」と訂正。

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ近鉄特ステキな特急2階電車

大阪一名古屋ノンストップ2時間18分

大阪上本町から名古屋ゆき...20往復

名古屋から大阪ゆき...20往復

伊勢から名古屋ゆき...10往復

オール座席指定・特急券は5日前から発売

近鉄日本線

評句

リレー



青森市 岡山県 今治市 大坂市

工藤 甲吉
木山 遠二
長野 文庫
西川 晃

山で死に遺品のカメラから

笑顔

清生

甲吉—あこがれの山で死んで本人は満足—といったものを感じさせ、半面、非常な遺族の悲しみを思わせる句であるが、「遺品のカメラから笑顔」は別に「山で死に」に限らなくてもよいような気がしてなんだかちよっと抵抗のようなものを感じさせられます。しかし、ひるがえって考えてみると、「海で死に」とか「事故で死に」ではやはりピンとこないところ。この句の生命があるようにも思われます。ともかくいま問題になっていいる若い人たちの山の遭難を扱ひ、いわばいまの時代を背景にしている句です。

無いが、繰り返し読んで見て、どうも「カメラから笑顔」の方に重点があるようにも思われる。もしそうとすれば「山で死に」が一寸気になる。「山から戻った」「山を下りた」位な意味の言葉でよいのではあるまいか。死んだ事を此処で強いて断るにも及ばまい。重複は避けたい。

文庫—名手だと思ふ私は「簡潔で含蓄あり詩趣あるものみな川柳なり」との観点から作句と句評をしているのでこの句に満足するのである。一字の無駄もなく一篇の小説であり詩情も湧くから傑作だと信ず。

晃—文庫氏は大変お褒めになっていますが、私は此の句は、清生氏の作品としてはむしろ凡作だと思います。非常に道具立てがうまく、そのない作品で、作者の機智は充分買えるのですが、私には作句が眼について実感に乏しいように感じられました。細部では、遠二氏が評されたように、「遺品」といえば死んだことは解るのだから「山で死に」はもっと適切な他の詞を選ぶべきでなかったかと思ひます。

甲吉—句のよしあしとなると、私は文庫氏が傑作と言われるほどほめる気にはなれないのであります。なにかそのまますを無理に詰め込んでいいるようで「山で死に」「カメラから笑顔」もなんとなく生硬な感じを与える。もっと句をやわらかくして情感を盛るべきではないか。そのためには言葉の言い替えや省略などが必要である。

「死に」「遺品」の重複が問題にされているが、あえて重複させているところに案外意味があるのかも知れない。昨日、今日の清生氏ではないのだから……。

遠二—「死に」と「遺品」の重複について、或は作者は、下五に笑いの文句があるので、上五の死の文句を捨て得なかつたのではあるまいか。つまり上五と下五を相呼応させて、句の調子をピンと強めたかつたのではあるまいか。

「カメラから笑顔」では、山登りで命を粗末にする当世の若者気質を出しています。死んだ本人が平気でニコニコとカメラから出てきたというのでしょうか。鬼に角抜けた目の無い句です。佳句の類へ入りたいと思います。

文庫—ある人ははめ或る人は貶す。感じ方、受取り方の相違でやむを得ないが、私はこの句は名句と思う。

晃—大先輩の文庫氏にさからうようになって、はなはだ申し訳ないのですが、私の川柳観にしたがつて此の句を鑑賞しますと、矢張り作者の演出が、眼につくようです。川柳に物語性を追求する作者としては、当然な表現かも知れませんが、余りに材料を揃えすぎているのが気になりました。

宮様は紙幣の温みまだ知らず

喜由

甲吉—私に「ふところ」とられる金があたたまり」という句がありますが、喜由さんの句は、金のある人は金の有難味を知らないということを詠んだ句とも受け取れるようにです。だから私は、この句を見たとき、金があつて金の温みを知らない人よりも金がなくて金の温みを知るわれわれ庶民の方がかえって仕合わせなのだという気になされたのである。ところで、いまの時世は、いちがいに宮様は紙幣の温みを知らず、とはかりもいえないご時世であることを考えると、この句はなんとなく今日以前、つまり封建時代的な句いを感じさせるのですが、いかがなものでしょうか。宮様必ずしも私の思い過ごしかも知れませんが……。ともかくこの句は私も三月号で拝見してチェックしている句ですし果たしてこの宮様はどんなことか。

遠二—紙幣の温みを知らぬということは、此句の場合、金儲けの苦労を知らない。蓄えることの面白さを知らない。金の無い辛ささえも知らない、等何れの一つを当嵌めて考えてもよいのではあるまいか。車の衝突事故によって閉金五万円を言渡され、それがどうしても納められず「自分の生命保険金で納めてくれ」と自殺した若者もあるそうだが、こうした辛さは宮様——庶民との距離の大幅縮まった現在の宮様でも、まだまだ御存じないだろう。「まだ知らず」の「まだ」は此句になくはならぬものでしょう。

文庫―甲吉氏の評に同感であるが私はこの句聊か含蓄に乏しいと思う。これは上五の名詞が不可ないの動詞を持つてくると生きている。つまり「お育ちが」などは如何。

晃―此の句を句に表われただけ

のことばで解すると、作者は或る宮様の行状を知悉しており、その宮様は昭和三十七年現在においても猶お、旧態依然として雲上びとであり、我々庶民とは全くかけ離れた存在であるというわけで、皇族を辛辣に諷刺した句ということになると思います。作者の真意がもし其処になくて、宮様は便宜上もってきたものであり、「紙幣の温み」に重点を置くものであれば、此の句は文庫氏が指摘されているように、上五の「宮様は」という詞は不適当であり、甲吉氏の評の如く、前時代的な句の強い作品といわざるを得ません。非常に個性の強い佳作を屢々発表される作者ですが、此の作品は成功とはいえないと思います。

甲吉―たとえば事実紙幣の温みを知らない宮様があるとしてそれを詠んだとしても、なんだか説明に過ぎるような気がしてなりません。晃氏の言っているとおり皇族を諷刺しようというのであればもっと別な行き方があるのではない

か。なお私は最初この句を読んだとき、この宮様はいわゆる平民へ嫁いだ宮様、たとえば清宮様のような宮様を指したのではないかとも思ったのだが、そうだとするといくらか句意が分るような気もするのである。

遠二―何を見て、何を聞いてそう感じたのか、それが知りたい。この句で注意を惹くのは「まだ」の二字だけだが、それでは晃氏の前半の批評で一杯一杯で、味のある句とはいえない。

文庫―裏を返せば「〇〇は紙幣の温み知って居り」となる筈だが「温みを知る」ということの表現がそれこそ「生ぬるい」と思うのです。

晃―前書のはしい句ですね。現在の宮様なら、結婚式の費用に数千万円つかったり、キャバレーで一晩に数十万の金を散ずる人気スターより、いくらか金の有難味を知っていられそうな感じがします。勿論我々庶民程痛切ではなからうけれど……。

やりよると息子を知るは男親

一 瓢

甲吉―やりよる――とは相当な息子であろう。この親にしてこの子ありというところ。「馬鹿ではないのだからいまに目が覚める日

が来る。見て見ぬふりをして放って置けばいいのである」と女親を叱るこの男親は、弘前という城下町に育った私の一同僚をまことにほうふつとさせるのである。新しいという句ではないが、川柳の面白さを思わせる句で「やりよる」が効いて成功している。われわれはこの「やりよる」によって句語を吟味することの大切さを改めて教えられるのである。

遠二―「やりよる」がウンと働いて、この男親サンの性質から、若き日の行状に至るまでを、ハッキリ教えて呉れる、まことに確かな句です。

文庫―前二名ともはめて居るが私も「やりよる」に千鈞の重味あると思うつまり「俺が息子の年頃にはまだ思想定まらず経済的に自立出来ず社会的に無力であったが息子はその年ですでに相当な仕事をやりよる」という意味の「やりよる」と解す。勿論女親だって頼もしく思っていることは確かだが、男親はど痛切に感じないのは当然ゆえ座五を男親としたところもよい。但し難をいえば「知るは」に一考の要あり。

晃―前三評者の評に尽きているようです。強いていえば、前評者達は作者の人物を良く識っている為、此の作品に表現されている

以上のものを此の句から汲み取って、やや褒めすぎの感なきにしもあらずです。文庫氏は「知るは」という表現に一考を要すと言われましたが、私も同感です。然し一句全体がもつ力強い調子と「やりよる」という詞がもつ働きまで、此の「知るは」という説明的な詞を説明に終らせていない事も認めます。此の句がいきいきと読者の心にひびくのは、作者の実感から湧き出た句だからでしょう。

甲吉―文庫氏の受け取り方にはなるほどというものがあ、むしろその方が正しいのかも知れないが、私には「私の同僚とその子」にこの句があまりにもピッタリしていたため、そこまで考える必要がなかったというのがほんとうです。

遠二―何れにせよ立派に頂ける句ですが、文庫氏のように解釈すれば「知るは」に、やはり引掛ります。最初の甲吉氏の解釈によって句を吟味して見るに、何処にも難とは見当りません。従って解釈が当たっているといえましよう。

然し作者をよく知る晃氏が「実感から湧き出た句」と言うて居られるのだから、作者の狙うところは、文庫氏の解釈と一致するのだ

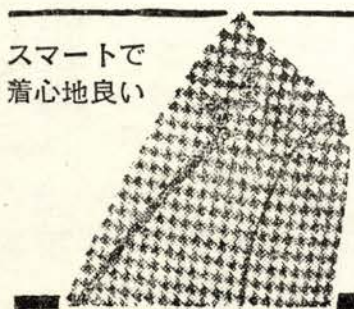
ろうと思います。楽しい句です。文庫―誰にでも感じさせる迫力はあるが句に美しさというものの、つまり句品には乏しいと思う。晃―「実感から湧き出た句」と言った事が、文庫氏の解釈と一致するとは限らないと思います。私には甲吉氏の鑑賞の方がびつたりするようです。再三文庫氏に逆らうようになりませんが、句品に乏しいという御批判に対しても大いに疑問をもっています。ともかくも男性的な気持のいい句だと思いま

(担当―真鍋一瓢)

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

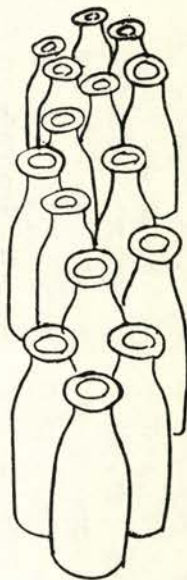
各地特約店に有り

スマートで
着心地良い



病氣と 川柳

(2)



北川春巢

ものでありましたし、五六年冬と六一年春の流行はB型によるものであったといわれております。流感はどの型で起こるか予測できませんので、予防注射にはA・B・C型のビールスを含んだ「多価ワクチン」を使っております。

普通感冒は、寒さなどのために鼻やのどの粘膜が傷つけられた所へ、平素はそこに付着している無害の菌が病原性を得て炎症を起こすもので、やはり人から人へと伝染もするのであります。誰でも感冒にはかかりますし、家庭の病気の半分が感冒で、医者が診断する患者の三分の一が感冒だといわれているほど感冒は数の多いものであります。

はやり風邪十七屋から引きはじめ
という古川柳がありますが、この句なども川柳作家の観察眼の鋭いことを現わしている句だと思えます。十七屋といいますが、飛脚屋のことでありまして、「十七夜」が「立待ち月」ですから、「忽ち着き」としゃれて飛脚屋のこと

をいったものであります。一九五七年の流感もアメリカから飛行機で羽田へ着いた旅客から、またたく間に全国へ拡がったのでありますが、江戸時代にも飛脚が持ってきたのがすぐさま江戸市中へ拡がったものと思えます。飛脚屋から流感がはやり出した、と詠んだ所は鋭い観察力だと思えます。次はプリントの

三日寝た課長の風邪へ御見舞
舞 方大

の句であります。これは人情の機微をうがった句であります。この句の「風邪」は流感が普通感冒か分りませんが、たかが風邪のために三日ほど課長が欠勤したのであります。課長でなければはたらかしておくような場合でも、課長の場合ですとわざわざ見舞に行ったという平社員（あるいは自分自身）の心の卑屈さを詠んであるのではありません。「御見舞」と下五に固い文字を使ってありますのは、「御見舞」と書いた果物が何か見舞品を持参したことを現わしたものと、私は解釈しました。わ

れながらその大げさを自嘲しているわけですね。

風邪の子へ見舞は玄関先で
去に 光輪

流感で学校を休んだ自分の子供の所へ、友達が見舞に来たのでありますが、うつるといけないので顔も見ずに玄関先だけで帰った、というのであります。あるいは、給食のパンを持って来る、というような場合もありましようが、その折の流感に対する親の心理がこの軽いスケッチに出ているのであります。

流感が結婚式を延ばさせる
光輪

予想もしなかった流感にかかったため（新郎の方か、新婦の方か）あるいは両方ともか）一生一度の大切な結婚式をも延期せざるを得なかった、ということをごんごうに表現したのであります。またプリントには書いてありませんが

流感が柔道五段をねかせた
満年

という句も、当時作られております。わざでは中々倒されない柔道五段の猛者も流感にはかなわなかった、という句であります。

往診のお医者の方がたんと
牛歩

この句は単なるスケッチの句であります。往診を受けた患者よりも往診に来た医者の方がよいに咳をしている所に矛盾を感じたのであります。風邪のはやっている時にはこんな風景も珍らしくなか

ったのであります。それをズバリそのまま詠んだ所に皮肉味があり滑稽味があると思えます。

二 胃病

ひと口に胃病と申ししましても、胃カタルもあり胃潰瘍もあります。胃カタルにも急性のものや慢性のものがありますが、そんな診断のことは素人には分りませんので、川柳では「胃病」とか「胃が悪い」とか詠んであります。

胃が悪い話 酔うほどに忘れかけ 俊和

「胃が悪い胃が悪い」と平素いつている人が、酒を飲んで酔うにつれ、それを忘れたように飲み食いする。傍で見ていて恐ろしいほどだ、まるで胃が悪いのを忘れたよううだ、という句であります。人間のいやしい根性を批判した句であります。

やけくそで飲めばクロリとする胃病 柳瓢子

この句は、胃病の本人が詠んだ句のように表現してありますが、自分自身のことでなくともこのように表現してよいのであります。この句の面白い所は、酒を飲めば却って胃病が治る。と常識とは反対のことを詠んだ所にあるのであります。

胃の手術した人肴に酒をの 弘村

これは胃潰瘍で胃の手術をした人でありまして。本人は飲めないのに、見舞に行った人か、あるいは全快祝いの席上では、本人をダシ

にして飲んでゐるのであります。「着に」という言葉がこの句の生命であります。

三 下痢

下痢は腸カタルの症状であります。赤痢などの細菌によつても腸カタルは起こりますし、また食べ過ぎによつても腸カタルは起こるのであります。「寝冷え」でも下痢は起こると思われておりますが、単に冷えただけでは下痢は起こらないのであります。冷える前か後かにやはり食べ物が関係しておるのであります。

下痢をしなから枝豆の札を云い

この句は下痢をしている本人しか作れない句であります。枝豆をもらつて食べ過ぎたのであります。食べ過ぎたのは自分が悪いのであります。その下痢の原因になつた枝豆の札をいなければならぬ心の矛盾を詠んだ所が面白いのであります。

馬肥ゆる候を寝冷えの粥する

「馬肥ゆる候」といいますのは「天高く」に続いて「秋」の季節のことです。秋はまた「食欲の秋」でもあるわけであり、この時に当り寝冷えで下痢をしているため粥を食べなければならぬ自分の不運を詠んだ句であります。「馬肥ゆる候」という言葉がこの句の生命であり、その矛盾がこの句の面白い所でありま

す。

下痢一日 ハエの行方を見守りぬ

下痢をしますと、体から水分が出て行きますので体が非常にだるくなります。下痢をしていることはいわずに、体がだるいことだけを訴えて診てもらいに来る患者も多いのであります。ハエが来ててもそれを打ち殺す力もない、ただ飛んで行くのを目で見送っている。という句でありまして、体のだるさをうまく表現してあると思ひます。

四 結核

次は結核であります。結核は患者が非常に多く、また治るのにも時間がかり、大部分は何の自覚症状がありませんので、療養者の中にも多くの川柳作家がおられまして、句も沢山作られております。私は目についた句の中から少しばかり抜き出して参りました。

食うて寝て肥えて斗病なり

とかや

結核の療養はまた斗病ともい、昔から大気・安静・栄養の三つが大切なものとされております。主として化学療法が行なわれる今日でも、この原則はなんら変わっておりません。この句は、安静を守り栄養を取って肥えるのを、斗病とはそれだけのことか、と諷んだものであります。川柳はしゃべり言葉で作ればよい、と前に申しましたが、この句のようにしゃべり言

葉でなくても一向差支ありませんので、この句などはしゃべり言葉でない所が却つて面白いのであります。

斗病にラジオも持つて行くという

療養のために入院するの転地するのではありませんが、安静を守らなければならぬので退屈だらうから、とラジオを持つて行くというのであります。傍で見てゐる者には「療養に行くのにラジオを持つて行くなんて！」という訝しい気持があります。そこでこの句ができたわけであります。

斗病の散歩は樹を押し石をけり

病勢が落ついて来ますと散歩が許可されます。しかし散歩時間には制限がありますので、目先の変わった所へ行くわけにはいかず、毎日大体同じ道を通る、ということになります。歩くだけでは単調すぎますので、途中の樹を押ししてみたり、石ころをけつたりして單調を破ろうとします。そのスケッチがこの句であります。

看護婦の瞳が安静を保たせ

「瞳」は「メ」と読みます。もちろん「ヒトミ」と読む場合だってありますが、この場合はメであります。「眼や「目」とどう違ふかと申しますと、口ではいへませんが、やはり句を読んだ感じはどこか違ふのであります。耳でメとい

う発音を聞いた場合には「目」や「眼」と区別が付きません。それで読んで人に聞かせる場合には「このメはヒトミ」という字を書きます。」というふうに説明するのが常であります。安静が大切な療養において、「看護婦の燃えるような瞳」が精神の安静を保たしてくれない、という嘆きを詠んだ句であります。

病む胸を祭の太鼓きつう打

家で安静療養を続けている人に、祭太鼓が聞えて来ました。安静を守るためお参りは許されていないのであります。「太鼓を打つ音が、病む胸にきつくこたえた」と「打つ」という言葉が二つにかかつております。

結核は奥様だけをくい残し

結核が家族の者に次々とうつつて皆が死んでしまひ、奥様だけが生き残つたということを、「くい残し」と詠んであるのであります。世の中にはこんな例は多く、ここにも川柳作家の観察眼の鋭さが見られます。有名な石川啄木の

場合なども、先ず本人が結核にか

つたのであります。それが子供にうつつて一番先きに死にます。次にお母さんにうつつて、お母さんが死に、次に本人が死んだのであります。奥さんは生き残つたのであります。

み

牧人

胸を病む人の心境でありまして、胸を病む人を出すと肺の安静に悪いというので、大声を出すことも禁じられております。そこで大声で笑つて見たいという誘惑にかられたのを詠んだもので、病人の淋しい心境がよく出ております。

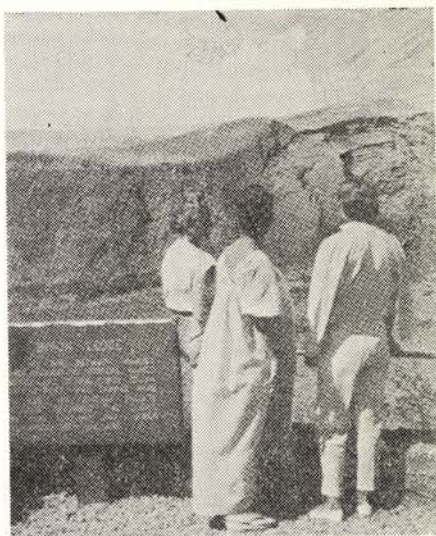
生き埋めの息苦しさだ胸を病めば

この句など、胸を病んでいる人しか分らない感じでありまして、肺の呼吸面積が減りますために息苦しいことを、こんな比喻によつて表現してあるのであります。肺を病む重症の病人ならば誰でも経験すること、川柳作家である句主はこんなうまい言葉ではっきりと表現されたのであります。普通の人ではこうはいえないのであります。

療養所 汽車から見ればい

い所 法泉子 全く客観的に詠まれておりますが、主観もないではないのであります。療養所は大抵景色のよい、空気のきれいな所にあります。その中では何百人もの人が苦しんだり悩んだりしているのでありまして、それを汽車の窓から見ました場合には、屋根など赤い色をしたたりして、さながら一幅の画の中にあるようであります。「汽車から見ればいい所」という作者の発見がこの句になったのであります。裏には、実は「いい所ではない」という意味も隠されておるのであります。

飛燕往來



中央の女の着ているのが流行のムウムウ(MUUMUU)と申すハワイのキノノで、いわばネマキですが、土人も白人も女の全部が愛用して堂々街中を散歩する姿は色とりどりで美しい。

でしよう
か。

エート肝

心なことを

1962-11-1
近頃は何かもおっくうになつて、人様からお手紙を頂くとハッと気がついて、ご返事を出すという無性さは、自分ながらあいそがきます。それにしても今年七十七才の川端童子画伯が、去る五月

に東京の高級屋で喜寿の祝賀個人展の約五十点の大小の名作品が、ほとんど全部が七十二才以後の作品と聞きました。——そうすると画伯は、七十二から七十七までの五年間に、名作約五十点を製作なされた勘定となりますが、画伯こそ本当の無形文化財ではない

1962-11-2
昨日……11月1日付を以て第

時間なし——第一巻の終り。第二巻は引き続き上演しますからご期待下さい。(ただし、入場無料)
筆不精手紙を書けば続きものの

——菫乃女史宛——

ホ ノ ル ル

並木東田楼

一巻のお手紙を送りましたところあいにくも今朝——11月2日もって川端九月号と十月号を同時に到着しましたので、九月号と十月号の一月月間の空間なるものは、いったいぜんたい、どうなったのでしょうか??? それにしても十月号は発行日より計算して、約一カ月しかかからず——これは順当である。問題は九月号の約二カ月間の道草時日である。

日本の郵便局内で永眠約一カ月に及びしものか? 或いはホノルル税関内でエロ本検査のまきぞえを食ってウツラウツラと、毎日居ねむりとアクビで税関倉庫のネズミ共に、いじめられて暮らしていたのかもしれぬ。

とにかく郵便物はAIR MA

IL以外は、いつ頃着くかわからないということ、あらかじめ覚悟すべきものなり。

——第二巻——終り。

快夢起さんの意向は存じませんが、小生としては、川端の発送方法は従前通りで差支えないと思います。日本の郵便局のヌルヌル扱いやホノルル税関のノイローゼ式エロ本検査はどうすることも出来ないじゃありませんか。——第三巻は阿茶先生の「売れ残り」問題です。ご期待を乞う。

川端の旅のつかれをいたわりぬ

1962-11-6

ご紹介下さいました阿茶先生の近作「舞扇孫の色気にはとする」は、お仰せの通り、日舞の急所をぐっとつかんでいて何んとも申されませんね。

見物していたおばあちゃんが、孫の色気と同時に感じて、なんともいえないやせるせなさを、孫にかこつけて表現した実感的な作品だと存じます。

さて本題に入りまして、男みな阿呆にみえてうれのこり

の名作ですが、私は以前にこの句にふれて、米国の職業婦人連の「売れ残り組」のことを少しばかり書いたと思いますが、いったい米国の女はどシヤクにさわるヤツはありません。これと申すも殖民時代の女ヒデリが原因ですが、近作拙作、

レディーファーストだから女がつけあがり

でその一端を表現しました通り、自分の亭主は勿論のこと、すべての男性を自分の召使いのように取りあつかい、何をしてやったってTHANK YOUなんて言葉などはオクビにも出さず「当りめいだ」なんて顔つきで言やあがらる。

これが「売れ残り」の原因となるわけですが、サテ小野小町さんの名歌的に「花の色はうつりにけりな……」となってくると、ハッと気がついたときには、もう手おくれとなって、誰も相手にせず、阿呆に見えた男は阿呆ではなく、実は自分が阿呆だったと思いついた頃にはすでに「いたずらにわが身世にふるながめせしに」と、小町さんの轍を踏みながら地団駄ふむ女の哀れさよ。

さわりながら、人間に男と女の二種類あることは、実に面白いと思います。私は男と女とは、性格的に全然正反対なものだと思います。それで私は阿茶先生に、この名作品に対して男の立場を一句作りました。

女みな利口に見えて寄りつけず

第三巻——終り。第四巻は「日本舞踊の巻」

川維九月号と十月号がいっしょにきて、盆と正月がかさなったようです。ちよっと二冊ともバラバラと拝見しましたが、両号とも実に充実した内容でビックリしました。

路郎先生の「道草」——山川阿茶先生の「若く見られる」——阿部佐保蘭先生の「吉川英治と川柳」など、何れも名文傑作の勢揃いでした。阿部佐保蘭先生の「これ小判だった一晩居てくれろ」の古川柳のブライズ教授

の名英訳を拝見して、川柳でも英訳が出来、しかも何んにも知らない外人にも川柳の真意が理解出来る英文名訳には、感銘久しゅういたしました。

どうぞこんな名訳を一句ずつでも結構ですから毎号ご掲載下さいませ。——さようなら。

二つの話

——漫才とたぬき——



不二田一三夫

川柳の笑いが、ツマラナイくすぐりであってはいけないというところを、耳がタコになるほどきかされてきたが、「まんざい」にもそれが要求された。

「ゲラゲラ笑わない台本を書いてほしい」というのがNHKの注文である。これには秋田実氏が指導にあたられるのだが、

「聞いているあいだは静かに耳をかたむけて、聞きおわってからフフと笑える楽しい作品であってほしい」

とは秋田実氏の言葉で、この執筆態度は川柳作句そのままだと思つた。

書いてみないとわからないが、この十年間、路郎先生から薫陶うけた作句精神を、そのまま台本にぶつけてみようと思うのである。

けなげにも家主の犬を咬んできた

骨立てたまま二次会へつい

て行き

早よいかな消えてしまおうと
火事見舞

豆秋川柳のように、ほのかな笑いが、おもわず吹き出るような作品を書いてみたい。どうやら川柳作家としては落第生らしいので、せめてこの川柳生活十年を台本に生かしていきたいと思つているのである。

「ご主人やこどもにモノを言うときより、猫にモノを言うときのほうが奥さんはやさしいコトバを使う」

と秋田実氏が言われたが、これなども聞きおわって、おもわず吹き出したものである。一句出来そうに思つたので、これをボクはメモしておいた。漫才のはなしから川柳ができるとなると、ボクの場合、逆輸入ということになるが、あるいは一石二鳥で川柳もウマくなれるかも知れないぞ、とは考えが甘いかな。

○

義父の告別式が、本社十一月旬会とカチ合つて愛媛県へ行った。六年間全出席を目の前にして実に残念だった。この八年間に欠席二回だからそのほうは優等生だったのに、かえすがえすも残念なこと

であつた。

義母も病床にあつた。枕もとの壁には豆秋さんの短冊がかかって

いた。
むかしむかし稼げば楽にな
りしとか

豆秋川柳のファンだったのでボクが送ったのだが、枕元にあるとは知らなかった。豆秋川柳が今なお生きていることを再確認したわけ、この老ファンに旅のつかれもやわらかくはぐされ

た。
ボクのニツクネームを「たぬき」という。ある拝み屋がボクの身に八ヒキのタヌキがついていると言つた。ボクが一日に三四時間より睡眠をとらずに、ロクでもないモノを

二十年近

くも書き
つづけて

病氣にも
ならない

のは、タ
ヌキのせ

いだと言
うのであ

大阪・東京 京都・神戸

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！

「タヌキを落してあげる」

「タヌキが落ちたらどうなる？」

「もう書かなくてもいいようになる」

「メッソウな＼じゃ拝んでもう二三

ビキつけてほしい」

拝み屋がカンカンに怒った話か

ら、ボクはタヌキという名がつけ

られたのである。

愛媛へ来て伊予の大狸である富田狸通氏に会わずに帰るデはないと思つて、道後温泉の狸のれんを訪れた。

「タヌキとはいいいですね」と狸通氏は、ボクのタヌキの由来に非常に好感をもってくださつた。

初対面でも路郎門下と名乗つてのことだから、十年の知己を得た

ほどの七光りがあつたことはいまでもなかつた。

未亡人と娘時代

川柳 女の世界 (四)



水谷竹荘

未亡人

未亡人好きな机に向いて書き

紋太

未亡人になると女は、どこか寂しいように見える。それも歳をとってからなら、自然に見えるが、不幸、若くして夫に死別した場合いくら愉快そうにしても、しゃべってよく笑っても、どこことなく寂しそである。

そんな時、好きな机に向って物思いにふける姿は、又かれんなものもある。

未亡人やさしく聞けば泣いている

一三六

ところが学者に言わせれば、男と女の交わりは一番親密な人間関係だという。この一ばん親しい人間関係を経験したことのある女が独身になった場合、性の不満に苦しんで、時々、ヒステリー気味になったり、なんとなく社会生活がうまくいかなかったり、ひがんだ

りするのも、女よっての個人差はあるかもしれないが、未亡人の一面を物語るものでもあるし、特に美人で若い未亡人になると、世間のうわさがうるさいものでもある。

未亡人強く生きます舞扇

竹荘

未亡人ちつと気兼ね化粧なり

竹栄

銀行の中元が来る未亡人

塊人

夫に死なれた人妻はど悲しいものは少いだろうと思う。常識的にいえば、経済的にも、精神的にも、肉体的にも「これから一体どうして生きて行けばいいのだろう」と考える。

他人は簡単に「適当な人があったら再婚しなさい」とか「貞女、二夫につかえず」ということもあるがなどと勝手なことをいうものである。

未亡人遺品へそつと別れする

光穂

女の世界にとって、結婚は女にとって安定した職業でもある。いい悪いはその女の運によるのだから仕方があるまい。そして経済生活ばかりでなく、精神的にも安定するし、肉体的、生理的にも、女性の身体は男性の性分泌によって健康にさえるのである。呼吸器病、黄疽、発育不全症、神経質、ヒステリー等々の病氣は規則的な夫婦関係で自然に癒えるともていわれているくらいである。それが一べんに、すべてを失われるのだから、未亡人として目の前が真暗になるのも当然といえよう。

遺言はまだ判らない大広間

三太郎

末ッ子とミシンを習う未亡人

太郎丸

黙すれば淋し歌えばなお淋し

剣花坊

娘時代

女の世界で一番楽しい時、嬉しい時は、なんといっても娘時代であろうと思う。

十一才から十六才までを思春期、十七才から二十才までが青春期、いわゆる鬼も十八番茶も出花の娘盛りといえる。

年頃の娘一人をもて余し

和泉

全国の民謡でも、島の娘が「娘十六恋ごろ」と唄われているし、「女の一生」のジャンスが、女蕩しの青年に訳なく陶醉したのが、十七、カチューシャが蕩児ネフリードの胸へ身を投じたのが十八、ニューフェイスの女優「ナナ」が人気にのぼせ上って、身をもち崩したのも十八才である。歌舞伎の、八百屋お七も十六の時である。

出来心女を恐いものにする

天花

玉のこしにのった娘の将来

利子

案じ

宏方

かかり湯をはじき飛ばした

いわを

処女の肌

東洋鬼

舞扇持てばドライな娘とみえす

竹荘

(女の世界をまだまだ書きつづけてゆく予定でしたが、高血圧と心臓病の為、入院、療養することになりましたので、残念ですが、これで終ります。御愛読を謝します。)

川柳コーナー

林宏子さんと川柳

先生のご病氣以後、社の林宏子さんはどこへ行くにも先生のお供をしているが、句会では他の人たちといっしょに、いつか作句するようにになった。初めは時間つぶしのようだったが、それがいつのまにか、川柳まつりでは第二席、堺市民川柳大会では市長賞と、ゲンと腕があがった。

「やる気」を出せば、まだまだ伸びる人だから、われわれもボヤボヤしてはおられない。(F)



株式会社丸越

大阪市阿倍野区阿倍野筋3丁目60
電話大阪 (641) 3957・3958番
大阪市住吉区長狭田35
電話大阪 (671) 4985・4986番
大阪市東区平野新町3丁目1
電話大阪 (791) 2110・9814番
大阪市都島区都島本通3丁目104
電話大阪 (921) 1101・7459番
堺市熊野町2丁目20
電話堺 (2) 1600・3587番
大阪市城東区湊生町4丁目28
電話大阪 (931) 1445番
大阪市東淀川区十三西之町2・5
電話大阪 (301) 2684・6266番
大阪市西区九条通1・704
電話大阪 (531) 4200番

月賦

のデパート

良い安い買よい 十九月私

第四百十一回 大万川柳

「弱点」 入選発表



弱点を知って友情深くなり

人間の弱点故郷で逮捕され
奈良 一 麦

弱点を楯にしぶしぶ承知させ
尼崎 たもつ

お子達にと言う手土産を断れず
羽鳥野 与太郎

弱点が出来て人間らしくなり
大阪 福郎

お互いの過去に触れない睦じさ
京都 句楽坊

弱点を誇張するよに鼻へ塗り
大阪 あいき

我が家の弱点台風が知っていた
神戸 どんたく

連れ子して嫁ぎレジャーもない生
石川 光郎

たかられる覚悟で弱点打ちあける
大阪 生々庵

父親の弱身に触れず酌いでやり
大阪 小松園

腹臣から弱点洩れたとは知らず
大阪 庸佑

養子かと聞かれてかっとなあまへ
大阪 晃

弱点をかくす賛助費高うつき
和歌山 木魚

弱点に触れなくなつて妻も老い
笠岡 桃里

選者 麻生路郎先生
投句総数 五百十二句
入選 五十九句

弱点をかくす賛助費高うつき
和歌山 木魚

弱点に触れなくなつて妻も老い
笠岡 桃里

弱点を突いても大物わるびれず
和歌山 東天紅

駄目押しの一言いぬ弱身もち
富田林 東雲楼

評論家その弱点をまた突かれ
笠岡 真奇

ひいき目に見ても弱点目立ち過ぎ
大阪 生董

家出する素振りに弱い義理の母
堺 圭井堂

弱点をきれいな顔がカバーする
大阪 清人

弱点をつかれせわしい客づかい
岸和田 きさ子

折提げて帰れば固い顔をする
西宮 牧人

迷信に弱いおとこで出世せず
見島 恵二朗

ムキになったから弱点だとわかり
大阪 良

弱点をつかれてからはなり出し
大阪 良

平社員のうち弱点かばいいい
大阪 良

弱点に気づいたときは定年さ
倉敷 方大

弱点を握りつぶした太ッ腹
大阪 柳志

弱点のことには触れぬ紙包み
堺 南宗

弱点を社長アハハでうけながし
笠岡 忠三

弱点をつけば先生も人間だ
笠岡 忠三

我慢して持参金つき頂戴す
笠岡 忠三

学問のはかばかなんにも知らぬなり
笠岡 忠三

こせこせと師は弱点を指摘せず
笠岡 忠三

弱点も仲人少うし話とき
岡山 東岸

一生を食うだけ持って嫁く弱点
岡山 東岸

弱点をつかれ気まずい客をとり
岡山 東岸

弱点を知られ結婚詐欺に遭い
岡山 知恵美

お互いに弱点があり労資折れ
大阪 文秋

叩かれりや俺も埃りの出るからだ
大阪 文秋

おんなは受け身という一線を守る
大阪 梅里

キャッシュだつせと弱点突いてく
大阪 梅里

身におぼえあつてなだめる妻の前
西宮 多志

弱点を握られていた交際費
西宮 多志

弱点を握る二号で強く生き
西宮 多志

ワンマンが世相の壁にぶつかり
西宮 多志

弱点をカモフラージュする白書出
西宮 多志

弱点は子の作文に見破られ
大阪 柳志

まだ惚れている弱点へつけこまれ
大阪 柳志

身におぼえあつてなだめる側に居
堺 素郎

弱点へ顔色かえぬ年の功
堺 素郎

弱点の尻っぽ欄んで振りまわす
大阪 大然

弱点は互いに衝かぬ西成区
奈良 凡茶

弱点を見せぬ才女のうたてけれ
岡山 東岸

世辞のつもりが弱点に触れたらし
岡山 東岸

それだけは内緒にさせる札の束
西宮 多志

痛いところ突くなどのれんぐらせ
天ノ句

昭和三十七年度(十一月現在)
奈良 一 麦

大万川柳ベスト

一 柳志

二 梅里

三 十九平

四 藤波

五 静馬

みなさまのお買物センター

心斎橋 そごう

TEL(271)2221

一七〇 神戸

六 方大

七 晃

八 きさ子

九 圭水

一〇 遠二

★

次の兼題「尾行」五句以内

一月の予告

兼題「女性」五句以内

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三

ノ一〇

大万川柳会

★大万コーナー★

例年なれば十六点とれば入賞確

実でしたが本年度は果してどうで

しょうか。いよいよ後半追い込み

の激突です。

(梅里)



秋のてのひら

——亡き香林夫妻に寄せて——

高 鷲 亜 鈍

十月の本社句会で生々庵理事長

から突然武部香林氏御夫妻の訃が報じられて、のけぞらんばかりに愕然となった。先月の十六日、徳島県笠置山の杉林で男女一組の白骨死体となって発見されたという。なんと非情な新聞記事の報道だろう。僕は、これは人ごとではないとおもった。おつきは俺だぜ、と、久しぶりに顔をだした僕に、話しかけてきた小松園に口走ったら、あなたにはそんなことあらへん、と一言のもとに否認されてしまった。それはそのとおりで、深谷にわけ入って、誰にも知られず、身を骸骨にさらされるまで黙って死んでいる、そんな忙しいゴールデンはできそうもない。おそらく僕には……

—おまえは盲になろうと、鼻が落ちようと、そう簡単に死ぬ奴じゃねえ。
—憎まれっ、世にはばかるで、おまえさんのことだよ。
—死ぬ、といっても死ぬ男かい

な。

と周囲から詰めよってこられるのが判っているだけに、僕は意地でも生きぬくことに決めた。僕は世間へ面あてに死んでやる、よりも生き抜いてやる。生きて机竜之介のような悪業のかずかずを聖人君子ぶっている奴らの面あてにぶってやるのだ。

このように自ら構えて敵をつくっている僕に比較して、同じところに眼疾で不治といわれているもつとも恐ろしい宿病の緑内障に罹った香林は僕より一足先に盲人となり、若菜奥さんに手を曳かれた黒眼鏡に固い握手を交したのは三十五年の春で、それは郷里岡山市へ引揚げるため、大阪駅のプラットフォームで見送っていたのである。僕は握手した彼の掌を両掌に包んで私語いた。盲が目明きの句をつくらずに、盲の句をつくらせて欲しい。心境の吐露だね。よし判った、亜鈍の持論やな。まあそう、生命のある句だ。うんうん、今までも

つと亜鈍と話したかったな。俺もそうだ、同病相憫でもある。あんなも眼を大事にしないさい。ありがとう、と逆に僕の方が見舞われて彼の裏が熱くなったが、そのとき彼の黒眼鏡が外されてキラリと光る目がしらを拭いていた。僕は彼ら夫妻を乗せた列車がガタンと軋んで動き出したとき、列車の進みだす方へ大股に歩きながら、頑張れ、と叫んだ。窓から黒眼鏡をとったまま、うわつらの視線を空に向けて、アリガトと機嫌のよい表情だった。

僕と似たり寄つたりの脚の短い男だったが、顔も胴も団子のように丸い僕に対して、頭鉢の広い団扇のように薄く平べたい彼の顔からは陰相など絶対に見られず、いつも風呂から上ったようにつやつやして明るかった。

彼の大阪にいたときの「川柳雑誌」とその師路郎に尽した業績は眼疾を患ってからもつづけられ、その輝かしい功労はときに声涙くだる路郎師の感謝表彰となり、淀川支部を初め、後輩たちから敬慕され、その同輩からは親しまれていた。彼の不自由は、大阪にいた限りでは、苦にならなかったとおもう。何故なら彼の盲をかばう多くの、川柳一門の柳友たちの温愛に守られていたからだ。しかもその香林に影の形に添う如く、といえはありきたりだ。「壺坂」の沢市、お里を引合いにだす

のも古川柳を引用するようで浄るりめく。若菜さん、それは女学生時代から相愛の仲である関秀柳人がそろって還暦を超えるまで連れそい、そこで二人だけの生涯を結んだのであった。実に理想的な夫婦愛所詮、人と人との絆は、ギブアンドテークであらう。まず与えること。僕の勉強だミッションのモットーはマスターオブアサービスだった。無償の行為こそ、神の愛であるとか、汝の敵を愛せよ、などと言っておれない猜介姑息な僕は半盲が全盲になっても敵を仮想し、ヒガミ、ソネミ、ネタむ日常にあつて、ファイトをかきたてていたが、香林は眼が見えていたところから、盲になってからも、愛情をもって誰彼の世話をした。そして最期まで最愛の妻に尽すだけのことをしたから、若菜女史も喜んで心中たてしたのだろうと僕は想像する。

三十六年の年賀状、同年の暑中見舞は、香林夫妻の句を添えて、新住所から届けられた。印刷されていたから、多くの柳友たちも受けていたのだから、特に僕にはベンの女文字で、(若菜さんの代筆)僕の眼が心配であると添書がしてあった。去年の十月ごろ、僕の出した手紙が附箋つきで戻ってきた。門田屋敷の住所番地にあったのは配達されたのであるが、

当住所の香林ならぬ別名の方から、香林夫妻は家出をして目下行方不明という便りだった。その頃、本誌は、香林、若菜の不朽洞洞友に推薦と決り、早速本人宛に到達したところ、行方不明で返送された事を報じている。それより先に、香林筆になる(盲目のまま)色紙短冊が大阪の柳友たちに何枚も送られてきていた。これは可笑しいと、僕はただならざるものを感じた。頻繁というほどではなく、一昨年大阪を発つて以来、五、六回ぐらゐの便りを出しあい、それは、川柳と眼のことだけで、いつかなどは、当地の眼医者診断では微かながら視神経が生きているから望みなきに非ずということで、視神経を刺戟さすために、少量の酒を呑んでいるが、ほんやり明りが見えてきたので欣んでいる、という好便だった。又亜鈍何者ぞと、元気のよい川柳観をぶちこんできたりしたものだ。句評リレーでトップ香林、アンカー亜鈍で渡りあい、誌上では収まらないで私信で激戦したもの、ついでこの間の出来ことであつたようにさえおもう。

昨年の旧臘、岡山に出向き、灯竿、十九平などの長老に訊いても、四国のお遍路に出たらしい。という噂を僕は耳にしたが、既にその時は死出の旅路についていたの

である。

盲目苦、経済苦、子供がない。が県下の新聞紙上に報道された表面上の理由であつたし、誰でも一応はそうも考えられよう。しかし彼には立派に川柳があつた筈だ。彼の死を悲劇的に脚色することは、あまりにミジメだ。それでは彼と同じうき目にある僕自身のきのう、きょうを自虐に喘がざるをえないではないか。

香林と若菜の死は、もはや命を断つた限り生命ある句は削れまい。徐行からスピードのかかる瞬間を捉えて、頑張り！と嗷鳴った僕との誓を破つて、何喰わぬ顔で逝つた彼らが無精に吐立たし

い。

ゲーテの最大の傑作は、彼の一生涯である。とはジイドのゲーテ評にある一節であるが、ゲーテが多くの詩や小説にのこした作品よりもその一生涯を通じた彼の人生経験と尊しとみたジイドに代つて、僕に言えることは彼と彼女の最期は彼らの生涯を貫いて、最も純粹で美しい詩川柳をわれわれに書き遺して呉れたようなものだとおもう。

死をつくろう何の虚飾やハツカリもなく、カヤクの多い仰山な死にさまを嫌つた彼らの透き通つた道行き。

頬にふれるは秋のてのひら

香林

上方から都落して行方不明が伝

えられたのが三十六年の秋、今年になって約一年ぶりに発見され、われわれの耳朵を打つたのがこの秋。僕は香林からこの句がでたころ絶賛の言葉をかけたことであつたが、秋は静かで、ビイドロのように透いている。靈魂の秋とは投身自殺をした詩人の生田春月の言葉。喧燥を避け、幽の地で永久に眠つた香林夫妻の御霊は秋空に溶けて清澄である。

現在までの柳人間で曾てみない生涯の幕切れを画いた香林・若菜よ！

旅行苦吟

戸田古方

川柳雑誌七月号(四二二)で私の「川柳調でうった電報」を読ん

で下さった鳥取の鈴木村諷子さんから次のようなお手紙を頂きました。

「共鳴をもつて読ませていただきました。日常生活即ち川柳です。昨年南九州観光旅行に参加したので、駄作を可笑らんに供します。朝の連絡船で桜島を向うに磐岩だ、小松林だ、など想像し合つたことなど昨日の如く思い出します。……」

と五十句ばかり送ってこられました。

村諷子さんのコースは私と反対で、句は鹿児島を振り出しに、桜島、長崎鼻、指宿、宮崎、青島、別府となっております。

私も旅行をした六月以来、その時の句稿を抱いたまま三カ月、一切の作句のエネルギーを集めてはおりますものの、苦吟、又、苦吟。村諷子さんの句に啓蒙され

ばと思ひながら、ものした一文。銅を仰げばさつま晴れ上り

像 村諷子

「鹿児島」のところにあつた一句です。いうまでもなく西郷さんの銅像。私の旧作に

史論いろいろやっぱり西郷さんが好き

やはり日本人の好みにびつたり

の所が米遠の生命なんでしょう。

敬天愛人おいどんひょくく

り出て来そう

おいどんの死所のま下を通る汽車

岩崎谷から城山の辺り、生々しい煙硝の匂いを何とか句にしよう

とスケッチだけはしたものの、一読、見落しそうな無技巧の銅像の句に遙るかに「おいどん」を感じます。

西郷どんみたいに坐る桜島

まだこの方がましです。しかし

桜島には

磐岩のあいへ人間道をつけ

正にすばりです。磐岩道路と銘

打つて観光のど真ん中へ押出されて

います。「あいへ人間道をつ

け」とは何んといううまい用語法

でしょう。まだ見ぬ人々へPRの

句として、鹿児島市の観光課あた

りへ推薦したい位です。

磐岩のかけら一つだけひろ

い

私の好きな句で、推敲のしよう

もなく、できたままで、ながめま

わして、川柳塔へ出しておきまし

たが、どんなことでしょう。

磐岩原巨人どこかにいる如

く

これも生まの句ですが「あい

へ」の句には巨人も何もみな出て

います。

(つづく)

金泥集

麻生葭乃選

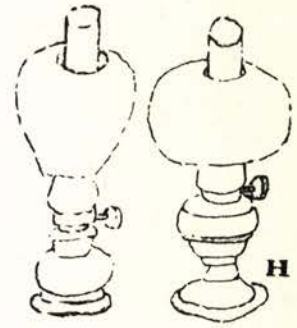
「急用」

急用へ押し出すように総がかり	阿茶	急用で出る子へ母があわてなや	同	急用の後追つて来る妻の声	花梢
急用で渋々帰る中狂言	同	急用の声がとどかぬ稲の波	きさ子	ウナ電で行けば涙が待って居た	同
急用へピンカールのまま帰つて来	同	急用の耳うち急に笑い出し	同	劇佳境木戸まで急用呼ばれてる	勝子
急用をいらいらさせる信号機	春栄	急用という手もつかいデイトする	清子	梯子酒親の危篤も知らず呑み	同
急用が代理を出した招待状	同	急用の筈が飲んでるアルサロで	同	酒の座へ急用つくって呼びにゆき	あいき
急用にして二次会を抜ける肚	同	急用と聞いてコハゼが止められず	同	新婚の早退急用としてしま	まさよ
急用へスピード違反でひつかかり	一栄	急用だのに電話ちつとも出てくれず	同	急用の電話妻から月給日	美代
急用へ空のタクシー見当らず	同	自動車を下りても見たい気がせかれ	同		
		急用に目くばせをして座をはずし	同		
			同		

次回題「器用」切十二月末日

溜息

川村好郎選



—

路

集

ため息とあくび交互に待つ喫茶 どんたく
ライバルの溜息だから心地よし 圭水
溜息がふと課長の目に止り 庸佑
溜息をファンにつかせて結婚し 晃男
溜息の中にマネキン無表情 可住
ボーナスへ妻も一緒にため息し 可住
年頃の娘のため息に母慌て 秀峰
溜息の代りに女嘔を吐き 専翁
月末の溜息子供気にして 句念坊
策のない溜息とにかく寝ると 大八洲
溜息の味へのんびり猫は 蛙水
溜息にふと新しいアイデァー 旋鳳
ため息で受話器を置かず恋となり 和太郎
ため息を税吏聞えぬふりをする 雄々
ため息へ女ごころの一筋に 一鶴
試験場へ母のため息とききそう 宗太郎

産月という溜息はいたわられ 藤波
ため息の目にゆっくり川流れ 光一
女房のため息思案もなく吐り 静水
ため息を母は媚いで聞いてくれ 静波
溜息に負けて添わせる気にもなり 紀太郎
ため息も武器二号は貯めている 同
ため息を芝居と踏んで金貸さず 与太郎
ため息を問えば何でもないと 同
ため息の通ぜぬ電話もどかし 光郎
ため息で甲斐性なしが帰つて来 初甫
鏡台へ映すため息愚痴となり 同
ため息を聞いても夫知らぬ顔 美由起
父の出す溜息一家不安がり 鶴汀
ため息を堪え女房のよく喋り 専翁
ため息をついて三面鏡から離れ ひ呂し
ため息のつづき寝言になつては 圭井堂
ため息も出ますよまた女の子 句楽坊
金の事でない溜息は羨まれ 雄声
ため息程でなかった呼出状 むじな
どん底の生活溜息にもならず 代仕男
袂越し聞く溜息の真綿めき 恵二郎
ため息のわけは算盤だけが知り 同

ため息をつきに見に米なアアシンシヨー 王石
ため息が鼻唄になったコップ酒 宗義
子沢山ため息ばかりしておれず 雄水
植あれば叩かん胸のため息よ 生薑
溜息をふと忘れさす柿の色 暁明
手形割る溜息誰も聞いていず 孝風
ワンマンの溜息ひとりになつてつき 十九平
ため息へ柱時計が二時を打ち 同
佳
ため息は姑がまだまだ達者なり 花乃子
現実に戻り溜息立ち上り 涼人
家中の溜息母の一人する 木魚
ため息が笑いに変る電話口 八郎
溜息を子も知るのが静かなり 判志
人
溜息をついてもはずむ娘の支度 藤波
地
溜息を添えて親身のあたたかさ 千翁
天
溜息へ無口な妻の底力 旭峯
すべり込み
杉谷湖山選
すべり込み押した認が上を向き 木魚
先頭がつますきトップへすべり込み 花乃子
すべり込み指定席なり特急車 同
すべり込みして出世の鍵握る 祥月
すべり込みして一等をかつさらい 圭水
料亭へ外車ゆつくりすべり込み 与太郎
村のバス鶏をあほつてすべり込み 光郎
すべり込み一言云うて受付ける 初甫

九十日ヨットはシスコへすべり込み 光一
守衛も馴れこになつたすべり込み 可住
全員をはらはらさせて汽車に乗り ろ亭
すべり込みそれから乗った口車 隆史
すべり込み課長はすでに席に居り 八郎
マラソンは噛み付きそりにすべり込み 蛙水
すべり込みおれの時計は五分前 藤波
勘定はもどりにしますすべり込み 同
すべり込み髭の守衛が待つて居る ひろし
すべり込み地位が待つて居るいい身分 八九寸
振り切つて無切符の儘すべり込む 圭井堂
すべり込みベースを持って立ち上り 暁明
浮動票食うてどうやらすべり込み 恵二郎
すべり込みみたいに秋の陽が落ちる 同
当選にすべり込みだつたとは言わす 宗義
出迎へへ特急風と滑り込み 生薑
発車ベル汗と一緒にすべり込み 旭峯
すべり込みみそれかネクタイ締めなおし 古心

品質優良
タチカペン先
TACHIKAWA PEN
タチカワビン
タチカワゼム
タチカワ画紙
立川ペン先株式会社
大阪市東区常盤町一丁目十一番地

すべり込み汽車無表情な尻を見せ 好女
すべり込みの痛アットになつて知り 成則
運の好い男補欠へすべり込み 十九平
すべり込みの常連守衛とも馴染み 素身郎
すべり込み合格角帽知つてゐる 久雄
すべり込み続き課長の目が光り 同
すべり込みタイムレコーダー奪い合い どんたく
すべり込み時計のせいにしてしまひ 圭水
すべり込み顔揃つてゐる通勤車 庸佑
駅長に尻を押されて発車ベル 千翁
背中からお札を置いてすべり込み 同
すべり込みエレベーターを待つ長さ 美由起
すべり込みしたがいち早く去に 静水
間に合うた息の背中へ自動ドアー 和三郎
すべり込みだつた人事係に教えられ 季賛
すべり込み出来ず職安願を待ち 蛙水
すべり込むつもり時計を信じきり 大八洲
可も不可もなく停年へすべり込み 生薑
住
無欠勤今日も走つてすべり込み 鵜汀
すべり込みしたのが会をかき廻し 孝風
ウナ電の後追いかけてすべり込み 涼人
すべり込み改札口は顔なじみ 十九平
すべり込み赤信号が多過ぎる 八九寸
すべり込みせぬからアメンまで怒り 雄々
すべり込み坐るところへ坐られ 静水
すべり込み門衛さんが苦笑い 代仕男
すべり込み煙草の煙でこまかす氣 和郎
すべり込み守衛にこにこ笑いかけ 保夫
人
すべり込み蝶ネクタイがひん曲がり 宗太郎
地
門衛が早やく早やくと呼んでくれ 雄水

天
皆勤實すべり込んでる日もあつて 和郎
軸
款待に甘えて汽車に置き去られ 見送りの手はず通りにすり込み
旅先
水谷竹莊選
一度行つただけの旅先から年賀 花乃子
船までも隠れて旅先法螺を吹き 市郎
旅先で余計恋しき増してくる 圭水
旅先で思ひぬ人にばたと会い 庸佑
旅先で子等に土産のこけし買ひ 雪美
旅先の浮気と女真に受けず 和郎
つれにヌードも覗く宿の下駄 圭井堂
旅先の名物大阪駅で買ひ 瑞歩
旅先の夫婦気どりで追手が来 勝子
旅先でその銀座を歩かされ 光一
旅先の便りが帰宅して届き 静水
旅先の気易さ女房の愚痴もなく 紀太呂
旅先で噂の二人結ばれる 与太郎
仲居から民謡教わる旅に酔い 光郎
死か生か旅先の事故あんじられ 初子
旅先の夫の便り読みかえし 美由起
旅先で口一ぱいのホラを吹き 木魚
旅先の浴衣で新婚写しとき 鵜汀
旅先を変えて土産を厭で買ひ 専翁
旅先の病氣へ妻を呼び寄せる 晃男
旅先で時折財布押さえてみる ろ亭
旅先で散つた友呼ぶ笛を吹き 旋鳳
和三角

旅先のヌード気楽に見て帰り 雄々
旅先で名士款待せぬに合い 一鶴
旅先も課長は指揮で女中呼び 隆史
旅先の浮気が女秘書にばれ 宗太郎
旅先の名物話しくい違い 同
旅先で仲よくなつた話し好き 保夫
旅先のあわただしさに胃がもたれ 大八洲
旅先のチップは妻にまかしとき 蛙水
愛妻の注意旅先無事故にし 専翁
旅先の宿は夫婦になりすまし 孝正
旅先の浮気は旅で捨てて来る 清風
毎晩のように旅から電話かけ 句念坊
旅先で皆重役になりすまし 雄声
旅先で本場の味に舌鼓 藤波
旅先で羽目を外して社用旅 ひ呂し
名所よりネオンの町を見る旅行 むじな
旅先の浮気へ朝の陽がまぶし 愛鳩
旅先の宿で二号とおち合う気 代仕男
旅先の気楽はがきに漫画かき 恵二朗
旅先で一人来たのを後悔し 杏花
旅先をどこで知ったか記者が待ち 宗義
サービスがよい旅先で酔いっふれ 季賛
旅先で女にもてたこと言わず 清心
旅先でスラレ妻には疑ぐられ 生薑
旅先へとり越し苦労するも母 卯之助
旅先で貰つた風邪をこじらかし 古心
旅先の恥も土産の一つなり 不醉
旅先で使う言葉は標準語 素身郎
旅先で一人で祝うた誕生日 十九平
旅先でトランジスタ聞く市況 孝風
集印帳行く旅先でおして来る 祥月
持つものは旅先で金を借り 同
仲居さん同郷で追加する銚子 八九寸

色紙短冊
書画用品
大坂戎屋
丹月堂
電中セニセニ

旅先で聞いた話に尾ひれつけ 野迷路
旅先で知つた振りをして迷ひ 千翁
旅先の便りへ少々うそも混ぜ 同
こつそりと旅費の残りを確める 曉明
旅先の奇遇はかたき握手して 桂仙
佳
商用の旅は名所を素通りし 東雲樓
旅先で集めた宿の箸袋 ふみ子
札状が来て旅先の嘘がばれ 晃康
旅先で書く葉焼の詩人めき 圭井堂
旅先の人の情けが倍に込み どんたく
人
神社仏閣拝むでもなく見てある 光道
地
旅先のし行く先ききに趣味の友 涼人
天
八ミリに詰めて旅先持帰り 静波
軸
旅先で疲れを知らぬ子に疲れ

柳界展望



句
会

▼本社師走句会は九日(日)午後一時から千日前電停前、自安寺で開催、句会後引き続き同会場で恒例の忘年懇親宴が行われるので、柳人数のご出席をお願いする。

▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は十一月十五日(木)六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳句会(大阪市)が十一月十七日午後六時から大阪建設会館で開催。十一月二十七日が元「さつき」誌

▼第七回かはる会川柳と俳句の集いは九月十六日(日)午後一時から東京都高円寺の須田昌宏居で開催。▼第二回京都柳壇川柳大会は

十一月二十五日（日）正午から平

十一月二十七日が元「さつき」誌を主宰されていた坂澄風氏の七回忌に相当するので多景色会で開催された。▼伊東温泉川柳会では十一月十一日午前七時四十五分伊東駅発で、群馬の竹柳苑訪問句会をされる。

消息

▼路郎主幹は十一月十日(土)午後二時から大阪市立図書館で開催された第六回「著者は語る」会で、「川柳と世相」と題して講演をされた。▼河野春三氏(大阪府市)は十一月中旬過ぎ、同氏著「現代川柳への理解」の出版記念会に上京。▼田垣方大氏(倉敷市)は昨秋來自家用車を愛用、現在まで無事故ではあるが、「のろのろ運転手」の異名を頂戴して居られる由。又、愛嬌が近來川柳の作句をはじめたこととても楽しみにしているものと。▼西辻竹書

氏（奈良県）は十月二十七日、高知に遊ばれ約一週間逗留、疲労を恢復するつもりと。桂浜で「見えるでしょうあれがハワイとガイド言い」。▼田中辰二氏（熊本市）は最近血色は良くなったが、脚と耳は益々不自由になり難渋しておられるが「路郎先生には四国や東京御旅行など年令を意識されぬ御健康ぶりに、熊本は五月と十月が一番よい季節ですのでこの方面へも是非お出掛け下さい。」とお誘いの便りに接した。▼真鍋一瓢氏（大阪市）は九月末より背に腫物が出来、一カ月近く医者通いをしてようやく全快、何しろ背のことで自分に見えさせぬので医者と言ひなりに儲けさせていたような気がしますと。▼岡岡憲眼子氏（諫早市）は十月十四日長崎県民文芸大会に招待され、席上川柳大会に句評を担当された。▼塚越迷亭氏（東京都）は十月に入つて風邪のためすでに十日も静養されているがすつきりせず、病気を軽視する故もあって困つていられる。

▼小西雄々氏（米子市）は十月二十一日川維米子支部と倉吉川柳会との合同句会に出席、昨年より二十日も早く初雪のあった大山国立公園の紅葉の雄大な眺めを飽かず楽しました。鳥取から大西八歩氏の出席もあり三十名を越える盛会であった。▼西いわの氏（大阪府市）は十月十七日秋の行楽を小豆島から屋島へと遊ばれ「オリブの島を豊かな風ゆらぎ」の句信を寄せられた。▼山田季賛氏（高槻市）は十月十七日大津市に出張中

の余暇を三井寺、近江神宮に参詣「三井寺の鐘の余韻を聞かされる」▼弘津柳慶氏（柳井市）は十月一日から五日まで福岡、熊本へ出張、帰途若戸大橋を見物の予定であったが、大雨のため車窓からその偉容を眺められた。▼若本多久志氏（西宮市）は十月八日所用で福岡へ、帰途母方の祖父の墓参に尾道に下車、路郎先生の郷里だと思つと一層の懐きが湧きます。「師の君の郷里を訪えは懐しき」▼岩崎愛二氏（京都府）は十一月十三日山路を越えて香林氏夫妻が行かれた四国路に来ていました。今年はよく小マメに旅に出ました。これが今年のおつもこりになりました。もう「ヤツホーと呼べどエコーは返り来ず」▼川上三太郎氏（東京都）は十月三十日九日に亘る病院生活に終止符をうつて退院、余生を有意義に川柳のために使う事を念願しておられる。▼渡辺暁童氏（愛媛県）は九月二十二日町民運動会に、十月十日から十四日までは第一回全国へき地教育研究大会の当番で、北海道から鹿児島までの珍客を迎え多忙に過ごされた。十月十八日には息抜きに四国一周の旅を計画高知に遊ばれた。▼中村九呂平氏（下関市）は十月二日、夫人と五女加代子さんを同伴、山口県豊浦郡の豊田湖から石柱溪を観光、俵山温泉に回り足腰を伸ばして一日を清遊、「女房に出ぐせがついて地図を買い」▼江口葉乙女さん（大阪市）から、この度は香林・若菜ご夫妻のお気毒なお知らせを

うけ附のあつくなる思いでいっぱいです。若菜さんとは婦人友の会で目にかかり、ユーモアもあり親しみ深いお方でしたのに御心情お察し申し上げ、ひたすらに冥福をお祈り申しますと。▼石居高志氏（東京都）は昨年七月、自転車業界から不動産業へ転職、ほぼ基礎も固まったので再び川柳の勉強に力を入れようと念願して居られる。▼野尻南海氏（メルローズ・パーク）から、毎月の川柳雑誌の隅々に迄溢れる路郎先生の情熱をひしひしと受取って遙かにお喜び申しています。今日は全米を挙げたの選挙が終ってホッと一息という所です。ニューヨーク洲知事に再選のロックフェラー、カリフォルニア洲知事に落選のニクソン、ケネディ大統領の末弟が上院議員の席を得る等、世の中はやはり戦いの連続のようでありませう。

▼藤原吉氏（青森市）は別項記載の通り新居に移転されたが、このねぐらはわが家の大蔵大臣妻みのひとかたならぬやりくりで建てたものだけに私には今なお借家にいるような気がします。然しその後は「いびきしてわが家の屋根の下に寝る」の心境です。▼菱田満秋氏（名古屋市）は十一月六日社会社の慰安会で南紀の白浜温泉へ遊ばれた。六十人からの賑やかな旅で、名にし負う白浜のストリップも観賞しました。▼高鷲亜鈍氏（大阪市）から、七日の香林氏御夫妻の追悼会には久しぶり御顔を拝しうれしく存じました。最近

不朽の人々



大伴織物KK顧問の篠島静馬氏

あきらめてさとり開いた顔でなし

(静馬)

人並にいろいろな欲を持っているが、それよりも諦める方が早いせいか、いっこうに、うだつが上らない。それでも何んとか無事にその日その日を過してあります。有難いことだと思っております。

人並にいろいろな欲を持っているが、それよりも諦める方が早いせいか、いっこうに、うだつが上らない。それでも何んとか無事にその日その日を過してあります。有難いことだと思っております。

先立った柳友の中では小生にとつて一大ショックでした。憶えは小生の知る物故柳人では柳葉、かおる、里十九、野介、沐天、豆秋、方正、葉光、香林、若菜等十指に及ぶとは心細い限りです。▼戸倉普天氏(兵庫県)から、路郎先生には仙台に行かれました趣、もう少し早く知って居れば息仁一郎(東北大学教授)を御宿舎に向わせただけでしたが、又、香林氏の悲報に驚いています。遙かに小宅の仏壇から香を手向けた次第です。

▼池田可宵氏(長崎県)主宰の川柳がさき百号記念大会は別項記載の通り盛大に開催されたが、地方小誌で百号へ漕ぎつけた事は大変な仕事でもうそろそろ気楽に川柳を作りたく思っているとのことだが、長崎柳界のため一層のご活躍をお願い申し上げる。▼川岡壺眼子氏(諫早市)は長崎時事新聞のペンの趣味欄に「川柳の作り方味い方」と題して随筆を執筆された。▼阿部佐保蘭氏(東京都)は十一月十二日五十七回目の誕生日を迎え、川柳の手ほどきを受けた自楽人氏を自宅に招き、家族揃っての祝賀会を開かれた。

句集・柳書

▼西塚春魚著「春聯」が昭和三十七年十一月三日八戸市番町四〇はちのへ川柳社から出版された。大連旅順等大陸での昭和十三年頃よりの句三百句を収録。嘔三味、瀟明、正夫、三太郎諸氏の序がある。B6版五十四頁、非売品。

▼後藤青柳鬼著「野良犬」が飯田市知久町三ノ四六後藤ゆきをから発行された。昨年九月以降の百十五句掲載の第二自撰句集、価百二十円。▼岸本水府著「川柳読本」改訂四版が大阪市西成区有楽町九番傘川柳文庫から発行された。定価八十円、送料十円。

▼故小林不浪人川柳句碑が青森県黒石温泉郷中野神社境内に完成、十一月十一日(日)午前十一時から除幕式を挙行、式後、青森県下同好者による川柳五分競吟大会が開催された。句は前号既載。

不朽洞会から

正誤

転居

▼不田一三夫氏(大阪市)岳父豊島義大氏は昭和三十七年十一月六日死去、年八十。謹悼。▼柴田浪子氏(神戸市)は十月五日死去。ふあうすと同人。謹悼。

▼大山竹二氏(神戸市)は十一月五日午後一時、肺結核のため死去、年五十四。葬儀は六日神戸市生田区中山手通七ノ三四の自宅で行、氏は以前一狂と号し双竹亭の別号もあった。川柳作句は大正十二年秋、以来ふあうすとの鬼才といわれ清新の句を数多く成し代花梢と改号された。

改号

▼藤岡とも子さん(富田林市)は花梢と改号された。

転居

▼石居高志氏は東京都小平市美園町二八三へ転居。▼工藤甲吉氏は青森市金沢一〇ノ四九の新居へ。電話〇七六六番。▼菱田満秋氏は名古屋市中区和御器所町一の五〇へ。▼月原宵明氏は今治市常盤町八丁目へ。

▼前任理事、会が十月二十五日(木)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催、次の諸件を審議した。

不朽洞会から

正誤

▼前号四十二頁二段九行目、三十一行目、四十三頁三段最終行夢紅とあるはそれぞれ夢虹の誤りに付訂正。▼前号二十四頁中段十七行目、前々号二十三頁上段十四行目、句主名に根山杏花とあるはそれぞれ根上杏花の誤りに付訂正。(薫)

一、忘年句会について
一、その他
出席者、路郎、生々庵、多久志、文鏡、春集、恒明、いわをの諸氏。(多)

改号

▼一九六二年版「八尾市歌人クラブ歌集」が昭和三十七年八月十日発行された。編集兼発行責任者は玉島照波。あとがきに出詠者九十七名、載録歌総計八百三十一首、これで八尾市在住歌人の九十%迄は載録されている事を信じてある。A列5型、七十七頁。▼青玄同人合同句集Iが青玄百五十号記念に昭和三十七年十月七日尼崎市上阪部八一七ノ一〇青玄俳句会から発行された。参加同人七四人、収録作品三千七百句、フランス装幀型本、定価五百円。

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 十一月句会 (大阪市)

11月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

会場中央のカーテンを開らくと祭壇があり、故人の写真が何か云いたげにわれわれを見つめているようである。故人創設の淀川支部、川帷婦人友の会はじめとしての供物と花の友情が美しく心にしみる。

路郎主幹の柳話には師弟愛あり、夫婦愛あり、故人の努力家であり情熱家であったありし日の姿を、時には涙さえ浮かべて香林、若菜、夫妻の冥福を祈られた。

追悼吟を披露されたが、グツと胸にせまるもの、思わず目頭を押さえる人も見うけられた。

自安寺上人の説経や主幹の焼香が特に印象的で出席者一同の合掌もそぞろ涙をさそうものがあつた。

十一月句会の不朽洞賞カップは唐崎尊翁氏の獲得するところとなつたが、圭井堂氏の二回を追って、いよいよ来月の師走川柳大会は大きな興味をよぶことになる。

(薫)

出席者—路郎、生々庵、八郎、太郎、三司、黙平、圭井堂、木耳、静馬、柳志、薫風子、白柳、摩太郎、舟遊、水客、文蝶、和菜、梅里、隆子、晃、久米雄、いさむ、東洋男、一舟、女、万、好郎、数子、みさ子、判志、潮花、文秋、狂二、紫香、雄声、亜鈍、計光、繁雄、清人、いわを、礼司、孝夫、美都子、柳宏子、南宗、恒明、唐佑、古方、小松園、あいき、すゝむ、花村、栗、凡子、奈良子、阿茶、季賛、宏子、霞乃。

追悼吟 麻生路郎選

川柳も捨てて淋しき生涯よ 恒明
川柳塔にはじめて出来た比翼塚 摩太郎
よほどのことか夫婦は死をえらび 舟遊
連の座へ坐る旅にも二人連れ 文秋
あの世まで夫の杖となる旅路 柳宏子
後髪引く子もなくて二人逝く 一舟
手を引かれ棧橋を踏む門出にて 白柳
騒音を逃れた山に霜が降り 久米雄
手をひいてゆく極楽は風もなく 潮花
壺坂のよう若菜さん伏目でい 万の
禅僧に似て香林さん眼をつむる 同
両眼を閉じて我が身に置き替える 圭井堂
何の罪ありて奪ひし光りにや 同
手を引いて弥陀の浄土で息を入れ 静馬
訃報聞く夜の秒音の際立ちて 黙平
短冊に盲香林の字がにじむ 水客
ご兩人閨麗句会に花を添え 和菜
手をつなぎ冥途吟行してしなく 好郎
アベックで来て豆秋をおどろかせ 梅里
冥土でも仲のよいのを羨やまれ 文蝶
清らかな心の空気へとけて住み あいき
静かなる死であつたらばあつたらば 古方
露草の道は二人だけのもの 紫香
大阪の思い出箸蔵山へ置いて逝き 宏子
無に徹し無に帰す君を尊し見る 生々庵

悲しい計聴く日よ菊の首をたれ
めい土でも二人仲よくする柳話
手を曳かれ四国の山は険しから
冥黙すれば昔寺吟行眼にうつり
句会ではおしどり夫婦の君なりし
御光りを彼世に求めてご兩人
夢の国夫婦で川柳するもよし
句の友のいない今宵をなみず鳴く
天国で開眼の君と疑わず
慈父の眼で迎えてほしい箸蔵山
死してなお香林若菜の共にあり
縋ることなく盲のままで君は近く
在りし日の二人を偲ぶめおと吟
この時に観音様が出ざりしか
白骨へ落葉音なく重なり
白骨へ木が泣いている木の滴
神も今は二人の行手さえならず
うらやまし骨になつても二人づれ
近く齢にはあらじと思ひ秋夜長
天国にまでも二人の生きた愛
辞世の句遺す気もなく聞かせ合ひ
極楽へ来たらし見わたすかぎり花
天国の句会へ投句のすべもなし
兼題「冒険」清水白柳選

最大の冒険敢えてする挙式 八郎
しぐちんの冒険宝くじを買い 狂二
冒険やおまへんこなスケジュール 古方
冒険の若芽を親がまたつまむ 旅風
他人から見れば何でもない冒険 多志
端株買いたすさえ冒険ですと妻 万の
冒険も地球を飛び出すはどになり どんたく
まともでは出来ぬ冒険恋がさせ 一舟
身のはどを知る冒険が図に当り 和菜
助手席に女性を乗せてつ飛びし 清人
冒険の好きな男で嫁がこず 南宗
銭なしでいちかばちかの勝負する 数子
冒険の成果手堅く土地を買い 黙平

冒険を敢えてせぬ子を歯がゆがり
新人の若い投手をあえて出し
六甲まで冒険にする母の口
蒲団では寝つきの悪い冒険家
冒険は父ちゃんの背舞台にし
これからの冒険髭を剃りながら
テレビまね冒険ごっこに手がける
冒険な金を手にする十二月
冒険談神を恐れぬ筆で書き
冒険やないのにママは解らない
片親の眼には危いことばかり
大当り冒険ですよと軽く受け
冒険が当たっただけの成金さ
冒険は止まらずにアイデア売りこね
冒険へ自分一人を信じきり
冒険と思う手を打つ若さなり
歯の抜けた夢で冒険あきらめる
兼題「あと味」土井文蝶選

泣きじやうから寝た子へ残る梅 晃
べんぢやうのおだてに乗つてふと淋し 好郎
あと味は叱り飛ばした悔いとなり 久米雄
新聞を買いつて犯人落ちつかず 文秋
えげつない催促をした戻り道 多志
あと味の悪さ灰皿にまつて来 久米雄
初対面あと味のよい暖かさ 多志
あと味の悪さを残す伝言板 生
別れざわあと味残すテクニク どんたく
あと味を大事にしなアンコール 旅風
金一封あと味悪い笑いよう 句念坊
勘定書味もムードもそう褒めず 好郎
あと味の悪い喧嘩に負けられず 静馬
あと味へもうお迎えの車が来 万の
値切るだけ値切つた後を淋しがり いさむ
あと味を残さず示談笑い合ひ 宏子
あと味のよさはのれんに物言わせ 文秋
言い勝つてあとの煙草のほろにがし 繁雄
静馬

あと味の悪さそれから寄り付かず
あと味が良すぎ案する苦勞性
ハイテンとあじの悪さ氣にして
恋人と悲恋の映画見て 帰る
あと味を褒めりやおかわりついでくれ
たむれに話せし言葉誤解され
ユーモアもあってあと味よい男
孕ましておいてその儘寄り付かず
さばさばしたあと味が氣に入られ
高利貸にここにこにすれ違ひ
あと味を掘り出している爪楊枝
まごころを知つてもらえぬ別れ
当人が来てうわさ話がふつと切れ
ノーチアップあと味わく宿を出る
だまされてやつとあと味つきりし
あと味は利子をとらない金を貸し
あと味の悪さ儲かり過ぎていた
兼題「はけぐち」正本水客選

病む夫へホステス打ち明けかねる事
眉一つかくのもホステス念を入れ
軒並みにバーホステスの募集ビラ
アイシヤドリぬつてホステスと服なり
ホステスはもののはきになつただけ
ホステスの人柄名士になじまれる
ホステスと言われてみ入りかわらない
月給のないホステスと妻の愚痴
ホステスの逃げ場夫がありまの
スチユアデスに名を聞く好印象の旅
ホステスになつて都会の水に馴れ
バーテイのホステスフランス語が得意
重役の浮気ホステス引き受ける
勉強に來たホステスのゆきときどき
ホステスの慣れぬ手つきで酌さばし
ホステスの募集面談だけで済み
ホステスと見られたくなく地味に着る
手回しのよきホステスの名を覚え
大物への近付きホステス利用され
ホステスにご無理を頼む紙包
ホステスは待つてようなかおで 酌さ
花粉のようにホステスすく散つてゆき
指名犯の事でホステス署へよばれ
自惚れが又ホステスへ舞い戻り
ホステスになつて内緒の子を育て
ホステスの顔もやれやれ羽田着
マークしたホステス今日はおもて
改装してからホステスと名が変り
ホステスのチップを見抜くはにに馴れ
ホステスのチップで食われてそのまんま
ホステスに聞けば一夫が好と言う
ホステスの度量チンピラとせつけず
風邪をひきそうにホステス胸をあけ
ホステスのどつと畳へ来て座り
月収五万ホステスよりよく食つてヤン
ホステスの身の上多少脚色し

旅風
二人目を産むに姑の許可がいり
二人だけ歩けば二人連れに会い
悪玉善玉と二人を世間が分けてくれ
電話して逢うても話さない二人
杖の手の片手は妻にあずけるとき
ままことの二人はいつもババとママ
披露宴二人はとづくに消えており
二人して一人の子供もて余し
ビルの窓二人になれば明るすぎ
捜査線若いふたりが浮いてくる
ライバルに牽きさせてゆく俄か雨
手の早い男で二人にしておけず
こわがりが二人だけなら大胆な
二人だけになつてお尻がむすかゆし
お横突きつけて二人にして仲居
二人目の妻で我が娘に氣をつかい
成績の悪いふたりのうまが合い
二人には苦い言葉も言い添える

雄声
いさを
水客
紫香
隆子
八郎
一舟
柳志
庸佑
阿茶
南宗
狂二
晃
晃平
黙平
阿茶
舟遊
狂二
晃
文秋
庸佑
生々庵
宏子
清人
柳志
水客
柳志
和菜
静馬
梅里
庸佑
恒明
生々庵
梅里
古方
柳志
久米雄
万の

朝つばから若さはけぐちの唄
はけぐちは太平洋のかたにて
はけぐちをあせり不渡りつかまされ
はけぐちに選んだ場所がなお悪し
青春のはけぐちデモのジグザグに
はけぐちは上から下へ引きつかれ
はけぐちはいたずらばかりで達者
未亡人のはけ口今日も婦人会
はけぐちがなくてぶつづつ独り言
はけぐちもあるもの娘も嫁に行き
満鮮というはけぐちかふさがつて
はけぐちがないまま妻へ八つ当り
タフな管派手なはけぐち持つており
もやもやのはけぐち結局寝るときめ
はけぐちがなくて毎日肩が凝り
はけぐちにしてはじめてなコップ酒
はけぐちに写経したのをまたつづけ
うつぶんを晴らすは都会金が要り
兼題「ホステス」松江梅里選

ホステスの身の上多少脚色し
ホステスの度量チンピラとせつけず
風邪をひきそうにホステス胸をあけ
ホステスのどつと畳へ来て座り
月収五万ホステスよりよく食つてヤン
ホステスの身の上多少脚色し

席題「手のひら」浜田久米雄選
手のひらの汗も一緒に見る八卦
手のひらに最後の滴振つてみる
手のひらで良い氣になった運の筋
悪運続きに見なおす手のひら
手のひらへのせて鼻くそをつとし
小金なら持てる手のひら占われ
手のひらをみせて女の細い首
横綱の字型を額に奉り
手のひらを返してまごころを言う
手のひらを返したように白を切り
手相の本手近かな手のひらからためし
てのひらの冷たいひとを憶う秋
順番を待たず手のひらぬつと出し
手のひらの厚い男のたのもしく
手のひらに出る運命を信じきり
手のひらに袖の香りがまだ残り
手のひらにはいる仏となり給い
あかぎれの手に温かき握りめし
手のひらで明日のわたしを見てもらい
手のひらにまでカンニング書いた
手のひらで忘れた文字を確める
手のひらをかえすどころか従いてゆき
啄木を真似て手のひらみたりして
手のひらに女難の筋は見当らず
手のひらの生命線を教えられ
席題「二人」西森花村選
二人目のお産はあて知らせて来
皆去んで二人になった声になり
理性を淋しく思う日がある二人きり

天位受賞者
⑦水客の生々庵⑤文秋④阿茶③圭井
堂②一瓢・晃・雄声・柳志・白柳
②三司・圭水・好郎・静馬・一三
夫・恒明・進之助・多久志①客遊
子・庸佑・榮・和郎・梅里・正一・
舟遊・いさむ・みさ子・どんたく・
奈良子・旅風・黙平・梅柿・専翁
不朽洞賞杯受賞者
②圭井堂①圭水・一瓢・静馬・文
秋・多久志・恒明・みさ子・雄
声・専翁

37年度全出席者(十一月現在)
圭井堂・文秋・すむ・柳宏子・薰
風子・庸佑・静馬・生々庵・舟遊・
阿茶・雄声・いさを・季貴・宏子・
霞乃

遠花火二人して聞くれんじ窓 同
同行二人枯野の色の奥の奥 古 方
決心の二人へ雨の連絡船 小松園
四国路の秋へ二人の手の温味 久米雄
二人三脚妻こけさうでこけさうで 潮 花
氣をさかし二人だれば去ぬと言う 阿 茶
二人して動かす水屋音を立て 白 柳

金井文秋報

うめはれてばかり居て未だ浪人し 旋 風
二人きりになって松茸など探してす 圭井堂
決心が附いて二人の眼がきれい 小松園
それとなく二人へ仲居頭の眼 生 藍
胎教を信じ偉人の額をかけ 文 秋
あやかりに来たか如才のない男 梅 里
菊人形きもの日本が生きている 一三夫
警察でやつと理性をとりもどし 良 馬
理性ある夫婦陰気な喧嘩する 静 馬
酒に呑まれ理性心のすみで眠る あいさ
理性では判断できぬ仲となり 専 翁
からめての攻撃理性をしびれさせ 八 郎
近寄れば野心が消える程美人 一 舟
ハンカチの白さに野心包まれる 狂 二
野心家のうっかり土産忘れて来 文 蝶
妻の瞳が僕の野心を見抜いてた 柳 宏子
そつのない断り方にある野心 白 柳

川 雅 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

夕刊をかぶせ帰宅を膳が待ち 文 秋
テレビ見えて夕刊を読み忘れ 白 柳
飯まだかもう夕刊も読み終り 章 子
夕切は三時特ダネ社へ販ける 六 童子
浦島が帰って来そうなの砂浜 豊 子
選り飽きて砂をそのままで鶏にやう 珠 笑
朝飯の砂を噛む味試験前 清

ハンガーにズボン吊せば砂が落ち 宇佐夫
一握りの砂を喜ぶ都会の子 清 子
砂浜に子ガニが遊ぶ秋日和 柳 宏子
見合写真カラーモードに気がつかない 節 子
二枚カラーをそえて週刊誌 義 介
昆虫図鑑みな生きている虫のいろ 句 念坊
ローカルカラー出したいい柿のいろ 句 念坊
わたしにも彼氏を求め下さいませ 恵 子
若人に恵まればはえむしわ深し 政 子
ぐれた子へ落膽する母が待ち 城 東
めぐまれて母になる身は夢心地 城 東
恵まれて身の伴に気がつかず あいさ
赤い羽根一本買うて気が軽し 一 栄
舞姿えんじの裾にのぞく足袋 奉美司
餅のような肌思い出し寝つかれず 一 舟

川 雅 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

砂はかぬ貝が今夜のぐちとなる 美佐緒
ある時は砂場で掘ねる浩宮 紅 寿
風になでられた砂のことは 紫 蘭
アリバイの空白に居るサクラダ 和 三郎
風の空白金魚鉢水もなし 尚 平
天に地に逢う日は今日を限りとし 磯 男
水の流れてさかろうてあいにゆく 幸 郎
琴の音の位置骨董は光るのみ 同 郎



川 雅 岡山支部句会 (岡山市)

休日は農夫が似合うお役人 秀 光
恩給にして役人の穀を脱ぎ 麦太楼

役人の妻まで傘をきて威張り 千 駒
足許を見て役人は物を言い 桃 里
役人の端役が怖いことを言い 美 舟
役人の暇はあくびとなつて出る 七 面
陳情団の前に役人そりかえり 秋 月
役人の車がバンクもせず走り 旭 泉子
役人の星の長さを見て帰り 蛙 柳
役人になるなと母が強く言い 哲 郎
役人の型にはまって停年となり 哲 郎
役人のほろ酔い汚職の匂いがし 宗 義
養つてやる役人にベコベコし 正 一
役人の古手を雇う下心 雷 山
役人のズルさいんぎん無礼なり 三 門
役人の裏を知つて厚化粧 素身郎
課長にもなれず役人揃れもせず 東 岸
東大を出た役人にあしらわれ 照 路
役人の最後の線は規則です 照 路
雑談は別役人の目にもどり 仙 坊
役人の子が来て輪投げやめにする 久米雄

川 雅 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

スラッシュルきつちりすぎて苦勞する 作 一
ちやつかり屋釣銭一円まで貰い 生 藍
家計簿へ根掘り葉掘りのきつちりや 南 風
きつちりに帰つて妻をあわてさせ 東 村
きつちりの服髪を慌てさせ 豊 年
きつちりの仕出しへ飛入り来て慌て 万年青
きつちりにせいと割引いたに値切り 弘 道
きつちりの予算へあれも欲が出る 作 一
きつちりと来たので招いたのが慌て 実 男
きつちりに持たせて頼む子の使い 山 峰
きつちり米ながレディの気に召さず 浪 夫
きつちりに来た正直を笑われる 山 峰
きつちりに坐つて養子まだ若い 六 花

川 雅 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区深草町5 (361) 9373代
支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (291) 9629代
名古屋昭和区村田町2 (88) 9069

社交界がますます同志意地を張り 快夢起
片意地を張つて幸運とり逃し エス子
商魂は意地をひそめる程に長け 美 潮
変なもの流行るものだと思われ 須磨子
若後家の意地も時効の厚化粧 笑 有
流行を追うて髪切り爪を染め 紅 溪
振返る方が流行負けている 銀 水
老夫婦意地で別居の世帯もち 万里歩
ビケットも労資の意地へくたされる 浅 太
意地出して対抗せよとコーチの眼 萩 路
片意地を張つて晩酌はろ苦し 泉 水
建物を壊しげなしが流行し 平 八郎
意地はつて立てた操に子が報い カロ女
再婚は先夫へ絡む意地で決め 柳 葉
片意地がすぎて妻子にいやがられ あき坊
流行に女生 命の髪を切り 柳 山
流行つて妓服へ浮身の日が続き 暁 舟
流行のためにわざわざ醜くし よ志子
流行を追うて米櫃ついで忘れ 内 海
皮肉屋がよに意地悪る手を叩き 弦 月

川 雅 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

食欲の秋だと居候も食い 秋月

食欲は母をはらはらはらとさせ あやめ
食欲の秋へさんまが油ぎり 浄美
食欲の秋へさんまの色がさえ 正洲
誘惑の手に財布と相談し 照路
誘惑に負けて株式一寸買 竜泉
誘惑をされると意識して踊り 芝月
誘惑をして見たい娘に隙がなし 一
誘惑に負けてまぶしい月明り 賤女
誘惑へ心の隅で乗りたがり 桃里
台風が来そうで菊も枝をつき 良子
ステージで抱かれた菊にテープ飛ぶ 秀代
懸崖のこの一枝が伸びて来ず 宗義
菊づくり土にも少々金をかけ 博友
病人に見せるに白い菊を譲り 久米雄
義経の顔が冷めたい菊人形 胡凡

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

豊基法有難すぎて腹も立ち一保
執務する手より困窮よく動き 虞究
午後三時営業用の顔で出る 詩郎
仏心へなりきりたいが通う息 素瓢
電報へ悪い予感が戸をあける 鶴丸
ヌードショウ男の生存する限り 一机
名門の娘は小児マヒだった 無閑
斗争へ土方の眉は一文 明甫
嘘も方便電話でことわられ 布堂
ただ歩くばかりで話切り出せず 福女
大ころのように序二段泥をかみ 洞水
内祝いの犬の腕まで鯛の骨 まさよ
番犬をならすも野心の下ごころ 怪山
お人好し野心のあるを忘れて 弘朗
コルセットつくつく歩く有難さ 枝枝

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

子等はみな祭へ酒宴本調子 直仙
恋の顔生さる顔あるラッシユアワ 日出雄
ラッシユアワニセ札の使途こと決め 和幸
氏神の森しんかんと祭の夜 鶏生
薄化粧ラッシユアワへくられかけ 清泉
氏神が招く太鼓の音も 訝え 昌坊
ラッシユアワニセは満ちて人のダム 古朗
ラッシユアワニ二人ならんで歩かせず 明朗

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

共稼ぎインスタントで明け暮し 理恵
パイパイしながらバママ朝出る 利子
電気器具だんだん増えた共稼ぎ 勝喜
共稼ぎせよと仲人まとめる気 幸葉
産むまでは二人で決めた共稼ぎ 斐山
廻り道した人生が苦にならず 三郎
無燈火が廻り道する 交番所 勤
予備校へ廻り道したままでいる 勝子
思い出へちよと廻った老いの旅 康之介
原型を変えて小包戻って来 江
小包の紐丹念に妻はとき 古城
母さんの小包嬉しい便り来る 寛
小包へ奥のベッドも首を上げ かわず
厄年の自戒を忘れさせる酒 山里
ほろ酔の味人生に幸があり 義夫
オイと呼べハイと答えてくれる妻 松風
前日の続き本屋へ読みに行き 竹比呂
誘惑に負けた男へ夜が白み 柳翠

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

むだ足でも二階の窓が恋しくて 八郎
夏ばてでスリも失敗ばかりやり 句念坊
生涯余りカーブの多かりき 静幸
人生のカーブが声が変わるなり 雄声
カーブするところで免許をとらね 宏子

カーブするたびに日のさす方変り 圭水
長い汽車だとカーブに教えられ 貴山
カーブまたカーブで湯の香が強くなり 和郎
カーブまで来ると涙が落ちました 路郎

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

これ程の蔵書御主人読むやろか あいき
四書五経親子二代の塵をため 草右
読みもせぬつれづれ草はただ飾り 風仙洞
蔵書から社長の個性のそいてみ 宏子
再選と言うウヌボレの夢がさめ 竹青
情なやうぬばれた子で頭下げ 敏行
アササリーの洋書も交る蔵書棚 春雄
目を細め夜業の母の糸通し まさる
眼帯をとった日明る世間を見 没食子
美しい眼ににらまれて腰くだけ 愛論
冬服に昨年の羽根がついたまま 幸男
生まれ出ずひよこも羽根ひろげ ハナ子

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

この人のために出来たバツタシヤン 理休
すきのないうしろ姿で茶を喫し 瑤已
義経がこもも出てくる観光地 ぼたる
観光地らしくノレンもはためいて 柳波

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

古都満員セーター眼が喜々と群れ 呂人
髪のもどかないかなりまんかとラッシユ 将鴻
満員も裏口と云う窓もあり 周一
ふた開けて超満員の幸夫ショイ 六童子
柏嶋へ満員御礼の幕が派手 はじめ
ホーラクの風呂満員で子を忘れ トミエ
満員車大きなオチチが押しまくる 日出男

諫早川柳会 (諫早市)

川岡靈眼子報

未練などさうおへんと走り書き 美代
女より金に未練の残る朝 吉太郎
月にみる世代の影をうたにする あきら
月の内になんとかせよと高利貸 静林庵
月とスッポン夢食う虫と陸の口 花梢
台風禍月が照ってるトタン屋根 紅月
月たらずあれがガラスで育った子 幸吾
満月へ寝るには惜しく妻も居る 川柳堂
無事月満ちて候男の子 八郎
月一つ米ンだけにはあらねども 摩天郎

大萬

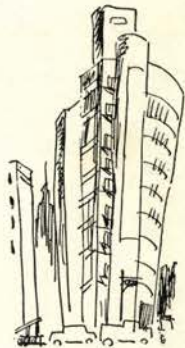
宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

料亭

串の店

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(七三)三九三五番
アベノ橋近地下食通街
TEL(七三)〇一四七番
千日前大劇裏
TEL(六三)二七一〇番



柳樽室

路郎生

★ことは珍らしく台風らしい台風もなく、歳末を迎えた。ありがたいことである。私は老驥をひき上げて、七月と十月の二回関東方面に旅をした。元気が元気だと、皆さんから言われるので、自分もその気になって元気ですよと言っているが、相変わらず地下鉄の階段や、プラットフォームの階段を上るのは苦手だ。来年は是非そうした壁をぶち破りたいと思っている。★歳末感としては本年中を通じて本誌の内容が、予想以上に好評であったということである。これも、寄稿家諸氏のご支援と愛読者各位のご好意のたまものだと感銘をあらたにしている。今後一層のご支援とごべんたつをお願いする。

★十一月七日の本社句会の夕、不幸な終焉となった香林・若葉の追悼を会場の自安寺で修した。読経や鉦の音も等蔵山へ通じるものがあったであろう。香林夫妻には嗣子がなかったため、柳人諸氏への告別式を社が行なったわけである。こんな事は四十一年の歴史を持つ社としても異例である。★その集りに香林夫妻の郷里の岡山支部長をしている浜田久米雄君が、岡

山代表として出席した。柳緑の深さをしみじみと感じた。

★句会が終わってから、久米雄君は不朽洞へ泊した。同君の句集刊行の相談で、午前一時近くまで、飲みながら話し込んでいた。勿論社から発行することになっている。何れ刊行は来年のことになるが、詳細を発表する時期がきたら出来るだけの応援をしてみたい。

★橋高薫風子君の「有情」もなかなか好評なので出し甲斐があったとよこんでいる。★堺市の八木摩太郎君や、其他の人も出すと言っているの、一九六三年は柳書の出版ブームになりそう。

★話は少し変わるが私が世話人になっている短詩文学文庫へ収めたい本について調べて見て、川柳に関する本が、詩や歌や俳句に比して、かなり貧弱だと思った。川柳は歴史的にいつても、二百年に足らないのであるから、ムリもないが、川柳家はもともとと勉強して、立派な柳書や句集を後進のために遺す責任があると思う。万葉全集の注釈本に匹敵しないので、せめて柳樽室全集の注釈や武玉川全集の注釈に一生を賭ける人が出てほしいのではないかと考える。

武玉川は我社で十一年間、かかって、四篇まで送付訳を発表してきたが、輪講の勢をとられていた秋の屋・東魚・省二の三氏とも既に鬼籍に入られ、後続部隊のないまま中絶している始末だ。富士野鞍馬・石曾根民郎氏等の一考を煩らわせないものである。本誌も営利事業ではないので、いよいよ着手されたとあれば片棒ぐらいかついで、外交語で言えば誌面の提供には充分の用意があることを申し上げておく。★本年の年賀状

は遅滞なく配達すると郵政大臣が宣言されているが、年賀状よりも一般の通信の遅配誤送のないよう特別な配慮が願いたい。隣県の配達でまだ四日間もかかるような局のあることを存じなのである。

★当局の施設の完備、従業員も亦郵便事務の促進に協力する意味から、誤字や不明瞭な文字を書かないこと。標札には本名又は通名・雅号も併記して、配達に便する心がけが必要だと思つてもらいたい。不達のお返しに際しても大変便利だからである。

★柳人交歓の年賀広告にご参加下さった方々に、広告部に代ってお礼申し上げる。まだ申込まれてない方々はこの際、是非一口でも申込み交歓の実を挙げられたい。

★終りに各位がすこぶる元気で新しい年を迎えられるようお祈りして筆を擱く。

▲▲▲ペンの散歩▲▲▲

▼ことしも追われずめの一年だったが執筆諸氏のおかげで楽しく仕事のできたことは、なによりのことである。この批判もあろうが、とにかく毎号情熱をかたむけた編集局一丸のすがたが本誌の内容なのだ。よりあたたかきご鞭撻をたまわりますように。▼こういうものを読みたい、と思われたい。それを書いていただくとありがたいのだが、これがなかなかかきむずかしいことなのである。句箋の一行書きならともかく、二十字詰の原稿用紙はウツウツシイとおっしゃる方が多いのだ。▼新年号の準備完了。あと数行で62年はおわる。▼いい年をお迎えください。(一三夫)

十二月句会——川柳支部
★玉造句会・10日(月)六時、

題、追込み・金・同情、所、市電玉造南百米大阪信用金庫。★南海電鉄句会・13日(木)六時、題、運賃・気がね・切札、所、難波高架下親和クラブ。★京都句会・16日(日)夕、題、レンズ・忘れる・損・井、所、四条繩子仲源寺、題、上出来。

北風・鷹・客所、霜柱・心居、明和研究句会・16日(日)一
時、題、難音・蕎麦・椿、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館★阿倍野句会・20日(木)七時、題、無

の待望

川柳集

有情

川柳句集が出ました！好評です！
橋高薫風子著 麻生路郎序

定価二百五十円 送費六〇円
★著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集委員として精進を続けている前途ある好作家である。
約七年間の習作「有情(うじよう)」を上梓して弘く世に問うことにした。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

川柳雑誌社

発行所

電話大阪(67)6081振替口座大阪75050

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋

なんば本橋条
大阪・東京・京都

★ 年末年始のご贈答にご利用下さい

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

風流
人間横丁

東野大八著

B 6型 二五八頁

価250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B 6型函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期の超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る。凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

若本多久志著 麻生路郎序

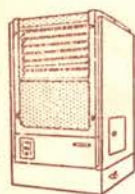
川柳
親ごころ子心価150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い寛めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

川柳雑誌社

振替口座大阪75050
電話 大阪 朝 6081大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

発行所

センター
暖房器

石炭・練炭・コークス・
ガス・石油・あんか・
テーブルヒーター・
オイルヒーター・

センター興業株式会社

取締役社長 山本最純

本社・工場 布施市高井田本通2-26
TEL (781) 2271(代)

柳人交歓年賀広告を募る

- ★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は十二月九日着便
- ★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)
- ★この広告料は年賀広告の特別料金です。すから他の広告には適用いたしません。

新年号へあなたの年賀広告を

川柳雑誌社

Printed in Japan

募
集

課題吟募集

モーニング (十句以内) 中島生々庵選
神前 (十句以内) 小西無庵選
のんびり (十句以内) 藤井明朗選
(十二月十五日締切)

流れ交 (十句以内) 大鶴喜由選
なれ交 (十句以内) 戸田古方選
(十句以内) 森下愛論選
(二月十五日締切)

毎号募集

近作柳樽 (龍巻廿句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (龍巻十句以内) 北川春巢選
文 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▼ 「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第三十七号

B 列5号 毎月一回一日発行

定価 九〇円 (送料六円)

(禁転載) 半力年 五七六円 共

昭和三十七年十一月廿五日印刷

昭和三十七年十二月一日発行

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地

福徳堂 麻生路郎

行柳人 幸二郎

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)6081
朝日口大阪 七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿七年十二月一日 発行(毎月一回一日発行)

編集 兼 発行印刷人

麻生幸二郎 発行所

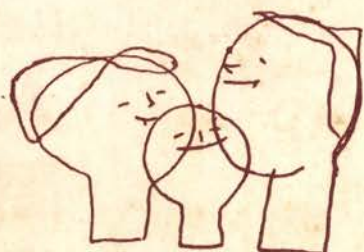
川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二番地 電話大阪(671)六〇八一

郵務口座大阪七五〇五番

定価九十円(送料六円)

一家そろつてホーライ党

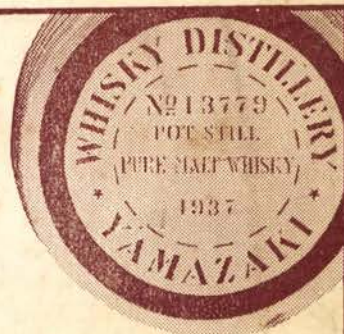


廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

洋酒の森屋



万人
その名を知り
万人
その味を賞す

世界の名酒

サントリー

ローヤル 3,000円 オールド 1,600円 角瓶 1,200円

水がアイロンかけをする

クラボウ
ベルファスト
セルフ・アイロン・コットン

技術提携先一米国D・ミリケン社
製造発売元一倉敷紡績株式会社



麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味わい方—

価 二五〇円
送 七〇円
費

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507